演劇奇譚act―age　『黄金の泉』実績解除RTA

とり弁

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

偉大なる先駆者兄貴姉貴たちに背を押されて初投稿です。

このレギュ走ってるのは私だけなので私が世界最速です。

目次

scene1『監督×役者×脚本＝これ死ゾ』――――1
Scene2『開始十分持ったから実質チャート通り』――11
Scene3『ガバが先か屑運が先か』――――21
Scene4『大胆な回想は女の子の特権』――――30
Scene5『走者は二兎を追う（捕まえられるとは言ってない）』――――42
Scene6『ガバってばっかじゃいられない』――――54
Scene7『オリチャーは短縮の夢を見るか？』――――65
死島編
Scene8『デスルーラまで何マイル？』――――75

ｓｃｅｎｅ１『監督×役者×脚本＝これ死ゾ』

皆さん初めまして。実際やったら過労死か衰弱死か精神分裂病が見えてる二足の草鞋じゃすまないＲＴＡ、はぁじまーるよー！

（淫夢要素はないので）ノンケ以外は帰ってくれないか！

今回走るゲームはこちら！『アクタージュ　ａｃｔ－ａｇｅ　演劇奇譚』にその後販売された第一弾ＤＬＣを突っ込んだものとなります。シナリオメーカーの頭の中は恐らく宇宙に繋がっているのだと思わず疑ってしまうほどのシナリオ量と自由度を誇るトーキング・アドベンチャーとして有名であった本作に、主人公に俳優としての生き方以外に映画監督から始まり一回も映画を撮ったことが無いのに映画評論家になることだってできるという、自由度というカクテルに更に原液を突っ込んだとして評判になりました。

ちなみに原作キャラをつけ狙うストーカーや暗殺者にまでなれますがこれはＤＬＣ無しでも出来ます、やっぱり頭おかしいな？（誉め言葉）

えー今回は自由度と比例してアホほど実績もある本作の中から『パルム・ドール』エンドを取り、国際映画祭において監督賞と俳優賞に加えて音楽・脚本・撮影などの賞を一つ以上同時に取る事で得られるトロフィー『黄金の泉』の獲得を目指します。

ちなみにエンド名はパルム・ドールですが表彰されるのはカンヌ国際映画祭に限定されていません。

むしろ世界三大映画祭を狙うよりは役者とスタッフ次第ではありますが世界三大ファンタスティック映画祭を狙う方が、日本においてはトロフィー獲得までの興行収入に差が出ますのでこれから走る人はそちらを狙うのも全然アリです、私は諸事情で無理でした（ガバ）

というのも三大映画祭と三大ファンタスティック映画祭の違いは堅苦しいか大衆向けかというガバガバな認識をしてもらえれば分かると思いますが、今作において監督としてのスキルを上げるにはヒゲのおじさんこと黒山墨字とかかわりを持ち技術を盗むのがルート的にもＲＴＡ的にもうま味なんです。

が、このヒゲは大衆ではなく自分が取りたい映画を撮る事にご執心ですので普通に技術を盗むとなるとどうしてもそっち方面に行きがちです。

かといって大衆受け監督といえばデスアイランド監督のどう見ても胡散臭い手塚由紀治が挙げられるのですが、この人はこの人で非常に手堅く情熱もありながらも、主人公が活動し始める時期には既に天使に魅入られています。

なので、百城千世子と同じ現場にいる時は主演を際立たせる系のスキルしかもらえません、ついでに言うとそれはヒゲでも貰えます。はぁ～っかえ（溜息）

なので、本ルートではヒゲから技術を盗みつつも俳優として活動することで演じる・カメラに映る側のスキルから派生させていくことで穴を埋める（意味深）ことを目指します。

また『黄金の泉』取得の為に必要な他の映画賞に関しては、多くの映画祭に存在する点と最後の一作までに完成させれば良いという点で脚本を選択します。普通に考えるとアンカーポイント等の技術流用が可能な撮影賞を狙いがちなんですが、監督賞を取る事が前提なのでカメラ回しながら監督をこなす為、余裕で過労死できます（１４敗）

なので、必ず脚本で行きましょう。特殊効果賞もアリですが全く違うスキルがいるのでＲＴＡには向きません。

そうして何度もわらじを振り回した結果出たのが今回の八年でトロフィー獲得の最速チャートとなります。これはどう頑張っても二桁年は必要だろうと考えられていた『黄金の泉』トロフィー獲得としては非常に快挙だという事が分かってもらえるでしょうか？　私も走ってる最中は汗が止まりませんでした……ガバと緊張とチャートの過密具合に（白目）

それでも記録が出たので満足です、え？　それでも八年間は長すぎでは、って？

……。

他に走っているひとがいない以上私が世界最速である事は明らか、ＱＥＤ．

ではさっそく「はじめから」を押してキャラクリエイトからやっていきましょうか！　性別は体力が必要なので勿論男、容姿についてはランダム……ではなくＤＬＣから追加されたプリセットの左から四番目を選択します。

というのもランダムでも構わないのですが、ある程度容姿の方から初期に持っている技能や成長率を弄れることが発覚しています、なので公式が用意してくれているプリセットを使う方が再走する際にチャートのズレが無くて便利なんですね～（白目）

その為今回もまるで高校生の日常モノの主人公に出てきそうな容姿と体格をした四番目君を選びます。彼は他のプリセットと違いリセマラ前提でないと魅力レベルが高くならない事で有名なんですが、その分不自然な体格とは無縁で体力の伸びがいいです。それに魅力が高くならない分他の初期技能を持っていることがあり得るので、ワラジムシになってもらう主人公には丁度良いのですね。

と、いうわけで四番目君の名前が穂積元就、略してホモ君になったところでスタートボタンを押したところから計測開始です。

はい、よーいスタート。

というわけでゲームが始まる高揚感をすぐさま溝に捨てて頂いてスキル確認の時間です。

今回のホモ君は……お、『魅力Ｌｖ３』ですね、これはうま味。本来俳優ＲＴＡの場合はここでＬｖ５を引くまでリセ案件なんですが今回のホモ君は主演男優なんかは目指しません。

むしろ今回のＲＴＡでは本来役者として張り合う原作主人公や天使を、自分の作品を彩る俳優として存分に活用する気マンマンですので、喰われかねない主演男優よりも彼女たちを引き立たせる助演男優として男優賞を狙っていく予定です。

その為には初期値込みでクッソイケメンなんていう主演男優ルートに持っていかれかねない魅力はフヨウラ！

でもふとすれ違った女子高生に「あの人イケメンじゃなかった～？」位は言われないとそもそも俳優として目が出ずに詰む（９敗）のでこのくらいの魅力は必要です、やっぱ世の中顔だよ！

そして他には……『話術Ｌｖ３』に『体力Ｌｖ４』！　これは過去最高のホモ君です！　特に話術はこの時点で持っているかいないかでこの先の伸びが全然違います、拙くても持っている限りは誰かと話すことで経験値微増していきますからね、体力の方もルームランナーで延々と走る時間を別の事に回せますのでタイム的にうま味です。どっちを優先するかと言われると断然話術なんですが。

さーてそれではお次はアビリティなんですが……まぁ当たり前のように『無念無想』ですね、この四番目君だと確定で持っているアビリティです。プリセット組にはこのように確定持ちアビリティがありますが、普通にキャラクリしても取れたりすることの出来るものばっかりですので、ぜひ最初はプリセットよりも自分で一から弄って（意味深）自分だけの演劇奇譚を楽しんで、どうぞ。私もやったんだからさ（同調圧力）

で、この名前だけは凄そうなアビリティですが要は何かをやっているときに頭の中で別の事も考える事が出来る、ただそれだけのアビリティです。使用法としてはスポンサーの意向でやらざるを得ない無駄なミーティング中なんかに脚本の事を考えてその分微量の脚本経験値が溜まる等ですね、ＲＴＡでは塵も積もれば山ですので嬉しいですが通常プレイでは誤差の範疇なのでいらないアビリティ筆頭です、悲しいなぁ……

そんな無念無想ですが……『Ｌｖ５』!?　無駄な引きを魅せるホモ君ですねぇ……ですがこれで例え昼寝しかけでも延々と芝居の事を考えられるので経験値稼ぎには最適です。なんか説明も読めませんが最大値になったスキルはその周回では他の副次効果が読めず、クリア後にどういう効果だったのか分かるのが本作の特徴ですので、ガバではないです。それだけは真実を伝えたかった。

まぁそんなことといっても普通にｗｉｋｉ見ればいいだけなんですが……やっぱり使えないアビリティ筆頭ですから書かれてません

ねぇ（クソデカ溜息）このＲＴＡ投稿し終わったら編集させてもらいますね……

ちなみに現時点でのホモ君のステータスは一般人では断じてあり得ないが一流の役者としても一流の監督としても一枚足りないというまさしく器用貧乏みたいなステータスになっております、ここから器用万能まで持っていくから見とけよ見とけよ～？

それではステータス画面を閉じて本編に戻りましょう、そしてほとんどステータスでリセしなくていいこのホモ君にとっては最初のリセマラポイントですね。

と、いうのも今作ではプレーヤー周りの環境設定はランダムで決まります。『二世』や『芸術家系』といった環境面におけるアド持ちか、多方面にアドがあったり無かったりする『一般家系』かのどちらかです。

ここで私が狙っていくのは『富裕層一般家系』です（９８敗）

富裕層である事で初期の時点から学生には高い買い物であるビデオカメラ等を揃えておくことが出来るようになるのと、親戚に業界人がいることの次にデビューのしやすさがグッと下がります。

ここで『富裕層芸術家系』にしないのはとあるキャラとの邂逅が出来なくなるのと、『二世』系によくある一定数のアンチが絶世のイケメンではないホモ君には特に湧きやすくなるためです。

これは『二世』でやる際には良く付き纏う問題ですので、もし芸術家系で走る方がいらっしゃれましたら気を付けておきましょう、基本イケメンなら問題ないです（無敗）

ではＯＰ映像をスキップ。飛ばすことのできないラスト部分が流れます……頼む富裕層一般家系オナシャス！　なんでもしますから！

＞あなたはカーテンから零れた朝日によって目が覚めた。

＞一人用としては大きなベッドから起き上がると、寝ぼけた顔を洗いにリビングへ向かう。

よっし！　まずは芸術家系か富裕層は確定ですね。ですがまだ油断は出来ません、次はどうだ……？

＞あなたは顔を洗い広いリビングに戻ってきた。一人暮らしとしては広いが、親の仕事もありセキュリティの揃った都合の良い場所は必須だったので仕方もない。
＞机にはあなたのおめかしした子どもの頃の写真が数人の子どもと一緒に写っている写真立てに飾られている。
＞あなたは懐かしさと当時の楽しさ、そして少しの寂しさを同時に思い出した。

やったぜ！

やりました！　これが富裕層かつ一般家系を狙った理由です！
このモノローグの通り、つまりホモ君は『元子役で現一般人の一人暮らし』の経歴持ちです。一般家庭から子役の経歴を持つにはある程度親が裕福である事が求められますので、そのために富裕層であることが必要だったんですね～
ちなみに子役上がりで現在も俳優である事はシステム上の都合で芸術家系でない限りは無理になっています。その為、一般家系である場合は必ずゲーム開始時には一般人なので知人キャラのテーブルは元子役であっても一般家系テーブルなので注意です。（元子役だからイケると考えて一般家系星アキラ幼馴染ルートを走ろうとした過去の私）冷えてるか～？
要は『芸術家系』では百城千世子や星アキラと最初から知り合いになることができ、『一般家系』では夜凪景と最初から知り合いになることができる、この三人に関してはこれが固定と言っていいでしょう。知らずに始めるとガバもガバなので注意ですね～
特に、本作は特殊スキル獲得には実際にその姿を視る必要があるので、初期から『メソッド演技』や『百式演技術』をいくらか磨いている事を求める場合は絶対間違えないようにしましょう、取得してから新たに逆を磨くのはある一定のフラグを踏むまで夜凪景と百城千世子の相性問題のため、ＲＴＡ的には……ナオキです。
とはいえ、今ＲＴＡにおいては『メソッド演技』の取得は必要あり

ません。監督が第一志望のホモ君にとって感情を入れ替える演技は、常に一定の視界を保っている必要がある監督にとってそこまで必要なものではないからです。逆に『百式演技術』は正確なカメラワークの参考になったりするので、何とか共演して取得を目指しましょう。

さて、元子役なのでホモ君がある程度は演技向けのアビリティも揃えてる事が確定しました。

一度は俳優からドロップアウトしてるのでそれに伴う上がり症などのデメリットもあったりするんですが、そこは器用貧乏とはいえステータスに穴が無いホモ君。そういったデメリットスキル発動条件のステータスを上回っているので発動しません、最高やな！

＞あなたは着替えを済ませると、朝食を作ってくれるヘルパーを待つことにする。

おっと流石富裕層スタート、朝食もヘルパーさん任せのようです。一人暮らしなのである程度家事に時間を取られることもあります。

そこは『無念無想』でカバーする予定だったんですけど、これのおかげで随分とスキル上げの時間が出来そうです。今はとにかく脚本系アビリティの為に頭の中で空想しておきましょう。ＲＴＡで無駄に出来る時間なんてない！

＞とめどなく溢れてくるアイディアを物語にしようとしていたあなたはインターホンが鳴ったことに気付いた。

＞あなたはいつものようにインターホンと繋がっている電話を手に取った。

おっと、これは……？

「おはよ。いつもの通りご飯作りにきたで、元就くん」

＞あなたはヘルパーの声を聴き、そのまま玄関に向かった。

やったぜ！（二度目）

インターホン越しに聞こえる張りのある関西弁、間違いなく湯島茜ちゃんですね！　これは大当たりです皆さん！

と、いうのも一般家系スタートでの知人原作キャラはデスアイランド編のオーディション組が大体テーブルに乗る事になっているんで

すが、その中でも茜ちゃんは当たりキャラです。
なんてったって普通の美少女であり、ハングリー精神も持ち、かつ人として出来ているキャラは茜ちゃんか真咲くんくらいです。その中でも特に茜ちゃんは色々とお得です。料理も出来たり女子力も高く、またある程度無理も聞いてくれるので友人として最高なんですよね。
え、俳優として？　そうねぇ……（白目）
いや、悪くないんですよ？　茜ちゃんは俳優として基本的なことはみんな持っています。でも原作キャラで俳優として有能な人はそんな部分はとうに通り越しているだけで……
ですが、今作はアクタージュ原作のＩＦも綴る事の出来るゲームですからね。主人公次第では埋もれている伸びしろが、茜ちゃんも原作キャラらしくありますので、茜ちゃんに主演女優賞を取らせるルートだって歩むことも出来ちゃいます、やっぱりこれ作成した人達の頭はマジェスティックですわ（誉め言葉）
さーて序盤から最高の引きを見せつけていますが、これからの引き次第では普通に茜ちゃん恋人ルートも選択肢に上がりますね。役者としては大成しなくとも普通に家庭を守るお母さんとしては最上級ですからね茜ちゃん。
特にこれから体力を振り絞っていくホモ君には体調管理をしてくれるキャラが必要なのでこの縁は大事にしたいところ……
と、いうよりなんだか茜ちゃん普段より綺麗になってるような？
ホモ君とは恐らく子役時代の縁なんでしょうが、そこから監督を目指すホモ君との交流で茜ちゃん側も何か変わってたりするんでしょうか。
このゲームは原作キャラと幼馴染だと、主人公に引っ張られる形で原作キャラのステータスが変わったりしますけど、体感三割に満たないくらいの発生率なんですけどね……
ですが、普段はバイトで生計を立てている茜ちゃんが昔なじみのホモ君のお世話だけで良くなっていれば、その分スキル上げ出来る時間が生まれているのかもしれません。

ではホモ君も玄関に到着したので、早速ドアを開けて女の子を中に連れ込みましょう。ホモなのにやってる事はノンケの極みなんだよなぁ……

＞あなたがドアを開けたその先にいたのは、長い髪を編んで肩前あたりに流しているあなたと同年代の女優、湯島茜と

……うん？　何か雲行きが……

「おはようございます、先輩。　お仕事しにきました」

＞長い黒髪を綺麗に伸ばした、人目を引く端正な容姿とスタイル、高めの身長と頭身を併せ持つ女優の卵。あなたの後輩である夜凪景の姿だった。

ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!!???

「僕は映画監督になりたいんだ。僕が考えて、僕が演じて、僕がまとめた映画を撮りたい」

彼と出会ったのは、いつの頃だったか。小さい頃から、それが口癖みたいな男の子やった。

子役として同じ舞台に立った時は、確か親の七光りで突っ込まれた子どもだと年長の子役の人に教えられてたから、最初はとても印象が悪かったかな。

だけど、演じてみると当時から元就くんは色々と違った。

他の子役の人たちが、感覚に頼ったり考えてこうすると決めた事だけやっている中で、子どもながらに周りと比べて格好良くない元就くんは、ずっと演じる中で考え事をしてた。

この演技を誰にみせるためにやるのか、この演技をどうやればいいのか、なぜこの演技が必要なのか。

まるで悟ったようにやってみせる元就くんに聞いてみた時は、当時

から本の虫だった彼らしく推理小説の一文をもじってこんな風に聞かせてくれた。
だから、そんな彼に引っ付いていればもっと上手くなれるんじゃないかな、なんてそんな打算が最初の方にあったのは覚えてる。
それがどんどん友情と呼ばれるものに変わっていったことも。
彼が、急に子役を辞めるって言い出した時の事も。
「ホンモノに出会った。私は、ああいう役者を見つけたかった。だから見つけた以上はここで立ち止まっていられない」
私が徐々に仕事が減っていった時も、元就くんは普通に仕事も入れて演じてたからその子が誰かは当時分からなかった。だけど、年を取って私なんて言い始めた彼の言葉に、友達としての引き留めより役者としてのプライドが勝った。
私は、ホンモノじゃないのかって。
「茜ちゃんだけだと、なれない。　でも、あんまり目掛けられないけど私もいるし」
だから大丈夫かもしれない、と。普段のぼーっとした顔で言われたときに、私はどんな思いを抱いたんだっけ。
結局、その後辞めてったけど普通に連絡は取りあってたし、演技指導(と、言っても彼が一言二言口をはさんでくるだけ)もやってもらったりした。
私が役者を諦めたくない、続けたいと高校中退して上京した時も、何も言わずに自分の所のヘルパーとして雇い入れてくれたこともある。
だから、今ではあの時のホンモノが一体誰の事だったかも知っているし、今隣でわたわたしている不世出の二人目のホンモノがこれから私を追い抜いて行くのだろう事も、何となく分かる気がする。
だけど。
「おはよ。いつもの通りご飯作りにきたで、元就くん」
彼が嘘をついたことは無い。だから、きっと。
諦めない私は、いつかきっと、ホンモノになれる。

Ｓｃｅｎｅ２『開始十分持ったから実質チャート通り』

＞長い黒髪を綺麗に伸ばした、人目を引く端正な容姿とスタイル、高めの身長と頭身を併せ持つ女優の卵。あなたの後輩である夜凪景の姿だった。

なんで？　なんで？　なんで？　なんで？

なんでこんなところでブルドーザーこと原作主人公景ちゃんとの遭遇があるんですか!?

ここは茜ちゃんと知り合いだったのが発覚したところで終わってもいいはずなんですが、まさかの原作キャラ二人目です。しかも家までやってきています。

ヘルパーさんのお仕事のようですけど、それでも男の一人暮らしに割と貞操観念というか映画で仕上げた女としての意識が強い景ちゃんがやってくるのは……（チャートが）マズいですよ先輩！

と、いうのも景ちゃんはキャラが濃くないと生きていけないまさしく役者の世界を舞台にした作品で、主人公を張っているようなキャラであります。

つまり、他者へ与える影響力というのもゲームにおいても凄まじいものがあります、原作で天使が千世子ちゃんになってその姿を捨てててでも景ちゃんに張り合おうとしていたのが印象深いですが、彼女の与える影響はそりゃもう凄いんですよ。まさしく役者界に突如として現れた怪獣王ですよ、マグロ喰ってない奴の方です。まぁ初期景ちゃんの経済状況からマグロ喰えるわけがないのでこの進化は当たり前なんですが。

問題は、それが勿論ホモ君にもあるって事ですね（白目）

徐にステータス画面を開いてみると、バッチェありましたねメソッド演技のアビリティ。しかも習熟度Ｃって、なんだこれは、たまげたなぁ……

最大が景ちゃんのＥＸである事を考えるとかなりホモ君自分の物にしていますね。これがどのくらいの代物かというと、普通にこれ単体で今の器用貧乏なホモ君をもう一回り弱くしたとしても、デスアイランド編のオーディション組に混ざれるくらいの完成度です。ふざけんな！（迫真）

ウッソだろお前、メソッド演技いらないムーブかました途端に景ちゃん初期知人ルートとか……リセか？　リセットか？

……。

……いや！　ここは続行です！

そもそも本来メソッド演技は景ちゃんがあぁいう風なので誤解されがちなんですが、天才たちの技術ではないんですよね。役というものに役者としての自分を脇において没入するという事は、逆に言えば考察として役を演じるという点からは最も遠いとも言えます。

実際に初期景ちゃんは俯瞰視点を得られない間は役に振り回されて役者からは程遠い姿が散見されていましたしね、今も凄まじい演技力の代わりに戻ってこられない危険性を孕んでいるように。

だから、ホモ君にとって必要なのは常にカメラの位置などを気にしていられる『百式演技術』の方なんですが……背に腹は代えられません、オリチャー発動です！

むしろこれはこの先に役者↓監督兼脚本家のルートを進む際に、役者の部分で躓かないための安全ラインを作ったと考えましょう（ポジティブ）

実際、先述の通りホモ君は現段階では一流の役者には一枚劣るステータスをしています。そのために序盤のオーディションにおいては、とにかく顔が良かったり体格が良い等の魅力や男としての希少度がホモ君よりも高いキャラに食われがちなので、何か売りがあると体のどこかにあたってくれ～！とばかりオーディション乱れ撃ちする必要が無くなりますね。

本チャートにおいてはその売りに元子役という経歴を生かし、知り

合っているプロデューサーや監督に対して昔のよしみで媚びを売る（直球）事を考えていたのですが、コネ合格よりは実力合格の方がその後の役者たちとの交流でマイナスが無いのでうま味です、うま味なんだ……誰が何と言おうとこれはうま味なんだ（自己暗示）

ここは本チャートにおいて一番大事な事なんですが、ホモ君は一般的な俳優ルートと違い最終的には監督になって映画を撮らなければいけません。その際に、いくら景ちゃんと天使を揃えてたとしても、主演と過労死寸前ホモ君だけでは良い映画は撮れません。必ず脇を固めてくれる俳優さんが必要なので、その最終的に何人いるかも分かってないのに幾人もの俳優に嫌われる事はなるだけ避けていきましょう（５敗）

特にホモ君は途中で監督業に移行することになります。つまり景ちゃんのような演技の中で相手を見直させるという事は機会的にも能力的にも無理無理カタツムリ！（無慈悲）

なので、とにかく多くの原作キャラに対して知人、出来たら友人並の好感度は稼いで映画のオファーを出したら優先的に受けてくれるくらいの定位置を目指しましょう。

じゃないとホモ君が監督として名前が出てきたころには世界的俳優になっているキャラは時間作ってくれません。特に景ちゃんはヒゲと柊さんがスケジュール握ってるので、友好関係を築いて景ちゃんに直接電話して頷いてもらう位はしないと無理です（９８敗）。

景ちゃんを釣ってしまえば、あとは天使に阿良也くんはよほどこちらが嫌われていない限り（２敗）釣れるので主演の心配はありません。王賀美さんは悩みどころですね、基本あのままで何でも出来るので主役が負けない限り名脇役だって務められますが……

「なんや元就くん、材料買っといてなーって言ってたのにいつものしかないやん！　もーほんとしょうがないなー」

「玉ねぎ、にんじん、じゃがいも……あ、でもカレーは作れるんじゃない茜ちゃん？」

「あかんあかん、元就くんカレーとブイヤベースは自分で作れるんよ。しかも放っておいたら延々それだけ食べ続けるんやで？　前は掃除

だけやったんやけどご飯の事聞いたら、七食カレーか汁物やってん」
「それは……私だったらルイとレイが許してくれないわ」
「やろー夜凪ちゃん？　やから雇い主の元就くんのお父さんに電話入れてな、ご飯の方も用意させてもらうようにしたんよ」
　色々と私の考えを説明していたら場面が切り替わってますね、関係性としては結構ずぼらなホモ君とそれを色々言いながらもテキパキ支度してくれる茜ちゃんって感じようです。アカネチャンカワイイヤッター！
　茜ちゃん知人スタートだと割とよく見れる光景ですが、そこに景ちゃん混じってるのは見た事ないですねぇ……（白目）しかも、原作の最初の頃が嘘のようにかなり仲は良さそうですね。これは……百合じゃな？
　実際景ちゃんは友人関係の詰め方や範囲がとてもガバガバです。貞操観念とかはしっかりしてるのにその辺脇が甘いんで、女主人公で始めると結構簡単に百合ルートにいけます。百合厨兄貴姉貴もぜひ景ちゃん百合ルートＲＴＡ走ってくれよな～
　そんなガバい景ちゃんですが、そのせいで助かる面と助からない面もあります。ずばり、名前呼びになっていれば一定以上の友好は稼げているのが確定することです！　ちなみに助からない面はそこからどこまで上がったのかが分かり辛い点です（２４敗）。
　非常に上がり切っていたり、景ちゃんにとって唯一無二の地位にいることになれば、愛称で呼んだりして分かるのですが、その域まで上がってると景ちゃんエンドがちらちらしだすので駄目です（無慈悲）
　さて、それでは気になる景ちゃんの友好度なんですが……さっき呼ばれたような気がしますが焦り過ぎてよく聞こえなかったので話しかけて確かめましょう（ガバ）
「？　先輩、どうかしたんですか」
「心配せんでもこういう時の為に家から野菜持ってきたから安心しーや」
　……セエエエエエエエフッッッ!!!（ガッツポ）
　ホモ君は茜ちゃんと同い年までなら一般家系スタート特有の景

ちゃんと同じ高校出身となります、そして先輩呼びは名前まで覚えていない、覚えていられなかった初期景ちゃんの時期特有のものです、そして茜ちゃんは茜ちゃん呼び……ここから導き出せるのは一つ！

ホモ君と景ちゃんの縁は茜ちゃん繋がり、そして割の良いバイトに茜ちゃんが景ちゃんを誘ったのが今ここに景ちゃんがいる理由ですね！（迷推理）

やー焦りました焦りました、この程度の好感度ならここから『百式演技術』を取るために天使に近づいても大丈夫そうですね。メソッド演技もありますが、どちらが監督業に使えるかと言うとこっちですからどんどん狙っていきましょう。

ちなみにですが、富裕層主人公と知人だったりすることで茜ちゃんに少し余裕が出来てる場合なんかには、バイト先で景ちゃんと茜ちゃんが遭遇する可能性は結構あります。同じ都市圏のアルバイターですからね、そこからここまで仲良くなっているパターンというとあんまり見たことはありませんが、なくはないので続行です。

ただ、それだとなんでメソッド演技をホモ君が吸収しているのかが気になる所ですが……ここで私は気づきました。

背景にチラチラ見えているのが分かると思いますが、独り暮らしのホモ君にあるまじき本棚がリビングにも並んでいますね。

富裕層スタートだと大抵家の中で出来る趣味が生えています。特に一般家系となるとインドア系統の趣味を持ってることが多いのですが、今回のホモ君の趣味は読書と……

「先輩、ご飯食べたらこの間の続きって今日も出来ますか？」

「ええなー、元就くんはお休みだし私も今日はレッスン入れてないから冒険者ヨナギとアカネの物語の続きやろか」

はい、茜ちゃんのセリフと本棚に並んだルールブックを見てもお解りの通りもう一つの趣味はＴＲＰＧですね、これはうま味！

何故かと言うとＴＲＰＧは話づくりと演技とが遊びながら出来る格好の趣味だからです。ホモ君がゲームマスター側で楽しむ場合は脚本・監督に加えて役者の経験値が溜まっていきますし、プレイヤー側で遊ぶ場合は趣味の割に役者の経験値が多めに入り、同じくプレイ

ヤーだったキャラの好感度が上がるようになっています。
ただし、この趣味は友人と結構な時間が必須なのでどんどんオーディション受けていくタイプのプレイスタイルだと合わないです、あと知人作らない王賀美ロールプレイとかでも使えません。美味しいだけの話なんてない、当たり前だよなぁ？
ですが、景ちゃんも参加するＴＲＰＧはホモ君にとって景ちゃんの空想での演技力も高められて茜ちゃんと仲良くでき、自分も序盤では稼ぎ辛い脚本・監督の経験値を貯めてメソッド演技を理解できるといううま味にうま味を足したうま味原液と言っていいくらいのものとなります。
景ちゃんがヒゲに見出される時期はゲーム開始後から一か月後となりますので、それまでは景ちゃん茜ちゃんに時に世話されつつ時に遊び、また他の時間で劇団天球の芝居を見に行ったりしましょう、即日完売のチケットでも富裕家庭で都内に家があるのに一人暮らしを許されてる程度の信用は稼いでいるホモ君なので、一日くらい休んで並んだってへーきへーき。
流石にずっと休んで好きなことしてると呼び出されてオーディション参加できなくなりますけどね（1敗）
それでは景ちゃん茜ちゃんが楽しくダイスを転がしている様子を倍速でご覧ください。
……それにしても、本来羅刹女で得られるはずの空想の演技を今の時点でいくらかモノにしちゃってるんですよね、この景ちゃんは。なお時間軸は原作始まってすらいません。デスアイランド編までにどこまで伸びるんでしょうかねこのゴジラ。
景ちゃんの演技に当てられたように茜ちゃんもポテンシャル伸ばしてますしね、最初綺麗になっているように見えたのはこれかぁ（納得）
下手すると天使を返り討ちにする可能性も出てきますが、流石にそうなるとリセ案件です。怪獣王に人々の思いを乗せた天使が勝つことを信じましょう（予言並感）
それでは今回はこの辺で、ご視聴ありがとうございました。

「いいね君、きっと役者に向いてる」
最初の出会いは、たしか一年前の誕生日からぴったし二ヶ月後。
バイトに向かう途中で、同じ学校の制服を着ていたから同級生か上級生だとは分かったけれど、当時の私にとってはだから何？　って気分だった。
だって同じクラスの隣の人の顔だって覚えていられないくらい、私はルイとレイの事でいっぱいいっぱいだったし、もし皆を見下してたって言われてもそれを否定することは出来なかったと思う。
そんなだったのに、私がその言葉で足を止めたのは、開口一番にその人が言ったことが弟妹が言った事に似ていたのと、それがスクリーンから私一人に向けて放たれたような、言葉だったから。
当時はまだ先輩も同じ高校にいたから、ひなが先輩について教えてくれた。いっつも眠そうな顔をしているくせに、一度話し出すと皆その言葉を聞いて、会話が止まらなくなるって有名な不思議な先輩。顔は整ってるけど、花井君と比べると全然かっこよくないとも言ってた。
顔が整っているかは、確かに良く見るウルトラ仮面と比べるとなんとなく違う感じはする。影が薄いというか、かっこよいと思うけど、目を閉じた後に姿が残らない。
でも、話し始めるとそうじゃない。
最初の一言だって、走る私に向けて、距離があったのに、声を張ったわけでもなかったのに。
「今帰ってる一年ってことは帰宅部か、これからレッスン？」
その次の言葉まで、私の耳にしっかりと入ってくる。
舞台俳優が、すぐそばの席の観客にも、二階席の観客にも同じ声量で同じ印象を与えるように。
話し始めた先輩は、そこがまるでスクリーンの中に引き込まれたように。
『既に撮影が始まっていて、私と先輩の二人に出番がやってきたように』

するりと私を、先輩の映画の登場人物にしてしまった。
「違うわ。これからバイトがあるの」
「バイト？　へぇ、勤労学生だ」
「勤労なんてものでもないわ、家族のためだもの」
「だったらなおさら私の話を聞いていきなよ。ほら、袖振り合うも？」
「多生の縁も時間に勝てるかしら」
「中々に強敵だろうけど、きっと私と君との出会いには彼女も負けるだろうさ」
「時間って女性なの？」
「美しいって口説かれてるのは大抵女性だしね」
あぁ、今思えば私の初めての舞台はあの放課後の街道だった。
監督・脚本は穂積元就。
観客は通りすがる人達で、エキストラも兼ねていて、そして主演は夜凪景と穂積元就。
確かにあのひと時は、なんでもない先輩の一言から始まったエチュードだったんだわ。

「あー、あそこの制服着てるって事は、やっぱり君が元就くんの言ってた子やったんやなー」
二度目の出会いは、あの後もっと給料が良い所あるよと先輩に言われた、ファミリーレストランのアルバイト先に勤め出してからずっと後。
後からだけど、そこのファミレスは先輩の実家が出資している所だと聞いた、道理で飛び込みに近かったのに、すぐに採用してもらえてシフトも好きなように入れてくれたと思ったわ。
そしてバイトが終わってファミレスの制服から学校の制服へと着替えた時に、丁度先輩がいて、話していた時に、話しかけてきたのが同じくホールにいたバイトの先輩、茜ちゃん。
私よりも長い髪を編んで、肩前あたりに流している可愛い人だったから、先輩の彼女さんなんだとすぐに思った。
だから帰ろうとしたら、まーまーまーまーって二人に肩を掴まれて

押し止められったけ。
「ん～……普通に可愛い、すごく綺麗！　……これじゃあかんのよね？」
「茜ちゃんは昔から感性が観客と一緒で素直だなぁ」
「褒めとらんやろ、それ」
「そうも聞こえるだろうね、けど茜ちゃんは気にしなくていいよ」
「はいはい、あとでちゃんと『理解』させてーな」
その後、ぐるぐると私の周りをまわっていた茜ちゃんが急に私を褒めてくれて、でも先輩と話して茜ちゃんはちょっと落ち込んで、またすぐにしゃんとなった。
その様子はちょっと可愛らしいものだったけど、それよりも私にとって大事なのは、その後。
先輩と茜ちゃんは、ほんの一瞬だけ目を合わせた。それで十分だというように。
確かにカチン、とあの時茜ちゃんにだけ聞こえる音が鳴ったんだわ。
「それじゃあ私達の出会いを祝福しましょう！　祝福にはなにがいいかしら？」
「互いの名前の交換がいい、名は祈りと同義だから」
「それは素敵！　そうしましょう！」
それはまたエチュードだった、初めてあった時と同じように。
だけど初めてあった時と違うのは、主演がきっと『監督の指示を全て飲み込んでいること』だ。
もう三月に入りそうだという時期だったのに、茜ちゃんが演じようとしていたのは夏の明るい中での演技、だから『あるはずのないワンピースが、茜ちゃんが回る姿に浮いているのが分かる』
先輩がすっと手を差し出したら、『あるはずのないカードを指に挟んで、そこに私の名前が書きこまれているのが見える』
「私は茜。湯島茜。　職業は女優さん」
「私は元就。穂積元就。　元子役の、監督志望」
二人が、私を挟むように手をこちらに伸ばして。

それが、私をこの世界へと招待するように広げられた。
「さぁ、君は？」
「私は景。夜凪景。　職業、役者」
だから、私は言葉に出してその手を取ったんだわ。
「で。なんでまだオーディション受けちゃいけないのかしら!?」
「まだまだ誰しもに分かる域まで君が上がってきてないからだよ、夜凪後輩」
「あはは、確かに夜凪ちゃん凄いけど、私も元就くんの言葉借りんと理解できんからな」
「まぁでも、次辺りは受けてみるといいよ。ほら、スターズがやってるやつ」
「……分かったわ。役者としても、演劇としても先達の『先輩』の話なら聞いてあげる」
「それなら私も先輩なんやけどな～」
「茜ちゃんは……茜ちゃんだから」

Ｓｃｅｎｅ３『ガバが先か屑運が先か』

皆さんこんにちは。茜ちゃんと景ちゃんが揃いのエプロンで料理している所を後方彼氏面しているホモ君の画面から今回はスタートです。そしていきなり超スピード!?　していきますがＲＴＡ的見どころはないのでシカタナイネ。

この間に前回のコメントで多かった部分について説明しておきましょうかね。

質問は何通りかありましたが結局はずばり、「夜凪ちゃんの好感度関係で死に過ぎじゃね？」という事に収束してます。確かに合計三桁敗は死に過ぎだと思われるでしょう、私も字面だけ見たらそう思います、ＴＡＳの追記じゃないんですからね。

しかし、実際にこのゲームで夜凪ちゃんと付き合っていく（意味深）とこれも決して大袈裟でも私がガバいわけでもないという事が分かってくれると思います。

まず、夜凪ちゃんは一定以上の好感度に達すると、そこから先は結婚エンドが見れるレベルまで行かない限り呼び名や態度で今どのあたりまで好感度稼いでいるのか分かりません。これは歴戦の夜凪ニスト達が何度も挑み台詞集を編纂するまで頑張っても無理でした、つまり私に出来るわけがない！（一度目）

なので、一つ目の関門がここになります。安全ラインが目視出来ないのでどこまで好感度稼いだかが分からない手探りである程度進める必要がありますので、夜凪ちゃんをホモ君の映画に誘うのは本ＲＴＡでの屈指のリセマラポイントとなっているんですね～（白目）

そして、二つ目の関門として……夜凪ちゃん、純粋であるのと同時に結構残酷なんですよね。

どういうことかと言いますと、夜凪ちゃんがメソッド演技の天才という言葉で言い表せないレベルの役者であることは皆さんお解りだと思うのですが、それと同時にその感性がそうさせるのか、無意識のうちに『役者の自分についてこれる人』を選別しがちなんですね。

これは原作でもデスアイランド編で特にかかわりの深かった三人

のうち、銀河鉄道の夜編で役者としての話を聞いたのが武光君だけだった事が顕著だと思います。確かに舞台俳優なのはあの三人のうち武光君だけでしたけれども、その後の羅刹女編で再登場し演者としての姿を見せる事となった彼とコマ割りの賑やかしになった二人とでは、あの時点で明暗が分かれているんですね。

なので、夜凪ちゃんにはなんとかして彼女についていける、もしくは彼女の糧となる位置にホモ君を置いておかないと知らないうちに彼女の中で線引きされちゃいます。そのため彼女を攻略する際はなるだけ有能な役者である姿をずっと見せつけると良いでしょう、通常プレイならね。

これの厄介なところは、線引きはしてもそれはそれとしてあの懐ガバガバ状態で友好関係を夜凪ちゃんは保つことにあります、つまりホントに線引きされたかどうかは実際に試してみないと分からないんですね～……クソゲーかな？

ともかく、好感度的には一定ラインを越えてないホモ君ですのでどこかで夜凪ちゃんの好感度を引き上げないといけませんが……ホモ君は最終的に器用万能になる器用貧乏、つまりゴジラである夜凪ちゃんには役者としてのステータスでがっつり負けています。人間的なステータスだと容姿以外は勝ちますけどね、運動能力も男女の違いのおかげで僅差ですがホモ君勝利してますし。

なので、ホモ君が夜凪ちゃんにアタックをかけるのは、天使と初共演して飛躍するまでの期間、つまりデスアイランド編で一定ライン確保＋線引き回避を狙うのが今チャートとなります。ホモ君はホモ君ですけどノンケですからね（矛盾）あんな美少女にアタックせずにはいられないので不自然ではありません。

そのために、デスアイランド編では必ずオーディション組にホモ君が入るようにしましょう。素ステが容姿厳選ホモには勝てないホモ君なので、本来はａｃｔパートでパーフェクトをたたき出したとしても合格するかどうかは七割方運が作用するのですが、今回は夜凪ちゃんから盗んだメソッド演技のおかげで開幕十割達成できそうです、お前の事が好きだったんだよ！

なお、それまでの夜凪ちゃんの成長に関してはヒゲに全面的に任せましょう。なんだかんだあのヒゲは悪いようにはしませんし飛び蹴りもインパクトはありますからね。

それに、映画監督としてのスキルを盗むためにも夜凪ちゃんにはバッチェ黒山墨字に気に入られてホモ君が現場にやってきやすい状況を築いてもらわねばいけませんし。

これも葦名の為……卑怯とはいうまいな（外道）

それでは、時期的には二週間後あたり夜凪ちゃんがスターズのオーディションに向かうという頃ですので、等速に戻してホモ君もそろそろ自分の為に動くとしましょう。

対外的には緊張する夜凪ちゃんにオーディションってこんな風だよ、というものを知らせる為、ＲＴＡ的にはここで天使チョコエルこと百城千世子ちゃんと繋がりを持っておくことを目的として、千世子ちゃんが出そうなＣＭ撮影のオーディションに乗り込みます。『百式演技術』の確保はチャートにも書かれてますからね、ちゃーんと取っておきましょう。ホモ君にとっては撮影に直接的に使えるスキル筆頭なので重要度Ａクラスですが、普通に俳優する分には序盤で習得するのはメソッド演技と二択くらいに考えておくと色々楽です、デスアイランド編までは夜凪ちゃんと千世子ちゃんは色々とアレだからね！

それでは富裕層特有のお金かかってそうなＰＣを立ち上げて、さーて世界情勢はっと……

……うーん、中々うま味なオーディションが見つかりません、今回のうま味は報酬ではなく千世子ちゃんがいそうなオーディションという事ですね。

ちなみに一般家系で比較的貧乏な家を引いた場合は原作キャラとの縁より報酬高いモノを優先して大丈夫です、なによりもまずはお金です。

ですが今のうま味は千世子ちゃんと会える事！　シャンプーか清涼飲料水のＣＭがあればほぼ確定なんですが……ありません、星アキラ確定の洗剤のＣＭならあるんですけどね。

流石現役ウルトラ仮面のイケメン俳優は主婦層に訴えかけたいＣＭに強いです、この時期にアキラ君に会えるのは千世子ちゃんに出会えるのと同時にこなせれば非常にうま味なんですけど、アキラ君単体はお呼びじゃないんですよねぇ……

ここで説明しておくと、星アキラ君はこのホモ君の最大のお手本であり最強の敵となります。なにせ超イケメン良血のサラブレッドでありながら彼の才能はバイプレーヤー、つまりは脇役なんです、それも自分を殺して主演を引き立てるタイプの。

これは初期の彼自身の求めた才能とは１８０度違うものなんですが、その才能も彼の恵まれた容姿と必死で磨いてきた技術の賜物です。そのせいでホモ君が学べる所が多数あるのに、肝心な部分は必ずアキラ君にはホモ君負けちゃうんですよ。

そう、イケメン度という部分で。やっぱ世の中顔なんやなって（血涙）

実際、アキラ君のバイプレーヤーとしての才能って、彼自身の見た目の輝きからどうしても引き寄せられる視線を、泥臭い演技を使う事で、カメラやスポットライトによってフォーカスされる主役になすり付ける、というのが肝だと思われます。

つまり、素で視線を集められないホモ君がそれを使うのはカタツムリが逆立ちするようなもの！　助演男優目指してるのにライバルは出来ても自分が絶対できないのは致命的だよなぁ？

なので、ホモ君はアキラ君が絶対習得できない『百式演技術』と『メソッド演技』で対抗しましょうね～（人間の屑）

主役のための技が脇役のために使えないという事はないのを分からせてやりますよ、これも監督系スキルとアビリティ集めるから出来る事ではあるんですけどね。

その辺は実際に使う時になった時に説明するとして……うーん、体感六割ってところですが、このカメラのＣＭが毎回ランダムの依頼群の中では一番千世子ちゃんがいる可能性高いですかね。

いなかった場合でも、夜凪ちゃんが飛び蹴りしている時期にあと一回は挟める時間があるので、その時を狙いましょう。カメラのＣＭは

最新カメラ触らせてもらえる可能性高いので撮影スキルも稼げますからね。
　では申し込み……の前に、子役の前歴があるので元の芸能事務所についてちゃんと調べておきましょう。元とはいえ所属していたところですので、その辺に断りなく芸能界復帰なんていうことになると、業界全体の評価が下がります。
　特にこういう不義理は王賀美さんのせいというかおかげというか、かっちりしているウルトラの母こと星アリサさんが嫌いますからね。必ず確認しておきましょう（1敗）
　ではホモ君の元所属事務所はっと……ファッ!?　嘘やろ!?
　……えー、ホモ君は金持ち特有のホモ君の為に作られた個人芸能事務所所属という事になっていました。いや、ない事はないんですけどね、こういうの。しかもホモ君は休止になっているのにまだ稼働中って……ファッ!?（二回目）
　茜ちゃんが女優として所属しちゃってるんですけれど!?
　嘘だろ真咲君との繋がりどこで確保すればいいんですかね!?
　いや待て落ち着きましょう、ホモ君と子役時代からの古なじみ枠に茜ちゃんが収まっていることと夜凪ちゃんと仲良くなってステータスが向上していることを考えれば……
　この事務所は実質ホモ君が所長みたいな個人事務所です。つまり強化茜ちゃんをこの手に握ったも同然ということだな！　この先助演女優の確保枠が常に一つ埋まると考えればこれはメリットの類です、真咲君との縁を質に入れてもメリットが勝つでしょう、真咲君すまんな！
　個人事務所なので、一応電子メールを送るだけはしといて、ではオーディションの時まで倍速！

　と、いうわけでオーディション当日です。ちなみにここで受かると次の日に撮影のようでちゃんと空けておくようにとか応募条件に書いてありました。つまり所属系の俳優はやってき辛いオーディショ

ンです。
もし芸能家系で所属事務所がある場合受け辛いのですがホモ君もほぼ一般人、周りもここから始めようというフレッシュな人が多いですね。
つまり、メソッド演技Ｃのホモ君が負ける道理はゼロです（断言）
オーディションで行われるのは主に演技審査と面接審査ですが、今回はオーディションの人数的に面接審査の中で審査員の指定する演技を見せればいいだけの話ですね。勿論面接ａｃｔも演技ａｃｔもちゃんと操作があるので失敗しないようにしましょう。
とはいえ私もＲＴＡ勢、ステータスが一線級ではないとはいえメソッド演技も持っているのに勝てないなんてことはありません。
『無念無想』もしっかり発動させて、今回は自分の演技を監督ならどう取るかについて考える事にしましょうか。
説明してたら番号を呼ばれたので面接室に入ります、って審査員に手塚由紀治監督いるじゃないですか！　これはデスアイランドでのオーディションの為にもますます本気で行って差し上げませんとねぇ……

それでは審査開始、イクゾー！　デッデッデデデデ！　（カーン）デデデデ！　〃

――はい、勝ち！　（０敗）
星アキラ君も武光君もいない最大でも魅力Ｌｖ４くらいの芸能人志望モブキャラに負けるようなホモ君じゃないんですよ！
面白味も無かったので思いっきり三倍速してたために、ちょっとこの先のチャート説明してたらもう次の日の本番に移っちゃいましたね。
ですが、面接の中での演技ａｃｔの際に出たお題が『不釣り合いな恋人をカメラで撮ろうとする青年』でしたのでこれはもう確実に……

＞本番に向けて瞑想していたあなたの耳に、テレビでよく聞く声が聞こえた。
「ごめんなさい　遅れてしまって。　これでも急いできたんだけど」
おっ、おっ……というかホモ君やる事渋いっすね……
＞振り返ったあなたに見えたのは、白兎を思わせるふわふわのショートヘアーに造形美の極致のような少女。　あなたが部屋に飾ってあるサインの主、百城千世子だ。

やったぜ！

よーし百城千世子との遭遇アンド共演ゲットです！　共演さえできれば『百式演技術』習得のきっかけを掴めますからね。後は『無念無想』でずっとそのことを考えていればデスアイランドオーディションまでにはホモ君のスペック的にギリギリEまでたどり着くでしょう！
あとは夜凪ちゃんのこともあるのでほどほどに話しつつ原作を待ちましょうか。相手も天使なので特に話しかけないでも共演者の線上で会話してくれますしね。
それにしても、ホモ君金持ちなのもあるでしょうけど百城千世子のサイン持ってるんですねぇ。経歴に誰々のファンとか出ないのですが、王賀美さんのサイン持ってるスタートもあるので不思議なことではないですね。でも羨ましい（血涙）
それじゃあ天使と少し話し込んだら本番です、馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前!!（天下無双）

――撮りやすい子役がいる。
手塚由紀治にとっての穂積元就の第一印象はそんな有り触れたものだった。
実際に穂積元就は子役としても遅咲きの年齢で、両親がスポンサーの位置に立てるような立場にある事からねじ込まれた気味の子役

だった。
しかし子役として華があるのかというと、無いわけでもないが他の既に目鼻立ちがくっきりしている早熟の子たちと比べれば、まだ凡庸な顔立ちであり、またアクション等もできなくもないが剣友会や劇団に入ってる子たちとは比べると一つ落ちるし、ミスがない完璧さなんかは勿論持ち合わせていない。
そういった、特に味のない子役だと思っていた印象が、二回、三回と使い続けるほどにどんどんと変わっていった事に覚えたのは、さて、恐怖だったか興奮だったか……
まるでカメラで撮られる空間が分かっているかのような立ち回り、そして監督が何を撮りたいのかを正確に理解した動き、そしてその監督の意思を他の子役に伝えることのできる伝達力。
あそこでカメラに写っているのは、役者ではなく助監督だと誰かが笑いながら言っていたが、僕は顔は笑いながらも本心の所笑えなかったんじゃなかったかなぁ。
だって、アレが助監督で収まる器であるはずがない。
穂積君がミスをするのは、いつだって彼の考える監督ならこう撮るという所を撮影スタッフや監督そのものが下回った時だけだ。
彼が他の子役から外れて不思議な顔をするときは、彼の考える最高のワンショットを撮り逃した時だけだ。
つまり、彼はあの年で既に自分の中の撮るべきものが出来上がっていたんだよ？　そんな商売敵に対して助監督なんてとてもとても、ってね。
実際に、彼は一つスターズに後々にわたるささいな爪痕を残していった後は簡単に役者を辞めていった。
その後には彼と仲の良かった子役の女の子が休止となった彼の代わりに彼の個人事務所の看板を背負って働いている。
その子も子役の頃から芽は出ないだろうと思われていた中から、まるで彼の目と耳を借りて監督の思考を読み、それに沿って演じるかのような動きを見事にやってのけている。
おかげで主役級の仕事は無いけれど、そこそこドラマのセリフ有り

の仕事だって入ってるはずだ。
きっと穂積君が何かしてるんだろうなぁ。メインは張れないけど、生え抜きで便利な女優を育てたもんだよ。オフィス華野はご愁傷様だね。
そんな彼が、数年ぶりにまた僕の前に現れた。
しかも、同業者じゃなくて俳優という形で、だ。
スターズに拾われてから、ルーチンワーク化した仕事に飽きてしまっていた僕の頭に火が宿る。
さぁ、今度は何をするために戻ってきたのかな、穂積君。
スターズ資料室に保管された、スターズ所属監督たちにとっての宝物であり悪夢の一つ。
『天使の素顔』を撮影した監督兼カメラマンさん？

Ｓｃｅｎｅ４『大胆な回想は女の子の特権』

私……百城千世子の小さなころから変わっていた点といえば、昆虫が好きなことと同じように、他人の横顔を見るのが好きな所だと思う。

うん、変わっていたっていうより変な子どもだったって言った方が正確なのかな？

誰かにみられているなんて思っていない人の横顔が好きだった。

私が見ているなんて気づいていない、いろんな人の無意識だから見せる表情を、横から盗み見るのが好きだった。

あは、気持ち悪いって周りの子どもたちは思ってたんじゃないかな、いや、思ってたんだろう。そりゃそうだよね、誰だって自分が気を抜いてる時の顔をまじまじと見られるのは嫌に決まっている。

でも私は、それを見るのが好きだったんだ。

じゃあ、私の横顔ってなんだろう？　そう思うのはそんなに不思議じゃなかった。

私の横顔はみんなにどう見られているんだろう。私が見ている時に、皆に私の横顔を見られているんじゃないだろうか？

そう思ったときから、私は人の視線が怖くなった。

前を見てると、左右の人の視線が分からなくて怖い。

左を見ても、前と後ろの人の視線が分からなくて怖い。右を見ても、後ろを見ても。

私の横顔を見てくるかもしれない、そう思うとどんな人の目も怖くなった。

そうなって、私は作り物の世界に没入した、逃げ出したって言い換えてもいいかも。

だって作り物の世界は私の横顔なんて気にしない。

作り物の世界は、私がその横顔をひたすら眺めても気にしない。

現実の世界よりも、ずっとずっと、私にとって理想の世界だった。

だから、そんな世界の人に出会ったのは陳腐だけれど、運命なんだと思う。

「役者に向いてる」
星アリサ。
スクリーンの向こうの、憧れだった、憧れでしかなかったその人は。
私に目線を合わせてくれて、私の頭をなでて、私を褒めてくれた。
当時から押しも押されもしない大女優だった彼女が、私にそう言ってくれた。
その嬉しさを、憧れを、全部を糧にして私は星を目指すように走り出した。
息苦しい世界の中で、それでもと自分に言い聞かせ、やれる事はなんでもやった。
表情の作り方をまず覚えた。次に言葉の選び方を揃えた。次は服装をイメージ通りに誂えることにした。すると所作もそれについてきた。服に合わせて体型も考え拵えるようになっていった。
寝ることも忘れて、大衆の望む私を作る作業に没頭した。
多分、それが私は楽しかったんだと思う。
だから、あの時の、初仕事の時の出会いはまさしく僥倖だった。
「いいな君、どこまでやってそれ作り上げたの？　いい横顔だ」
私の初仕事は、他の子役の子たちも含めてのＣＭ撮影だった。
だけど、そのＣＭを撮影するときから私は星アリサのプロデュース、ひいてはスターズの本命であったから、大人たちもスタッフも私を中心にして回っている。
だから、子役の子たちにとっては、いきなり現れた女の子が今まで自分たちの居たところを奪い取ったのと変わらなかったから、私は全然歓迎されてなかった。だけど、それは横顔からも読めていたから、どうにかは出来たんだけど。
多分、私より一つか二つ上の男の子。声をかけられるまでは、いつからここにいたのかも分からないような、子役にしては存在感の無いひと。実際に、その子に気付いた他の子たちと比べても、なんだか負けているような……そんな雰囲気の男の子。
だけど、周りの子たちがその子を見てからの横顔は違った。
やっと来た、っていう横顔。

ちゃんとしなきゃ、っていう横顔。
何を聞こうかな、っていう横顔。
まるでその子がこの撮影の全権を握っているように、その子がいるから子役たちがいるんだとでも言う様に。
だから、話しかけられたんだと思っても、その子の横顔を見てみたくなった。
幸い、私に声をかけてもすぐに他の子たちに話しかけられていたから、もう目は私の方を向いていない。
そのまま、その子の横顔を見ようとして――『目が合った』。
顔は話しかけられた子の方を向いている、更に聞かれた事に対してちゃんと対応している。
だけど、その子はずっと私を見ていた。まるで私たちのいる空間全てを『悟って』いるかのように。
だからその子の横顔は見えない、当たり前だ。ずっと私と目を合わせているのだから。
そのまま私はその子と目を合わせ続けた。なんでだろう、と今でも思うけれど多分私はその時からその子の事を知りたかったんだなと考える。
だって、それを知れば私はもっと先に進めるから。
それに気づいたのか彼は笑った。顔は横を向いたままで、合わせた目だけが笑って、私を手招きした。素直に私は近寄ると、そのまま他の子たちを置いて、本番の準備をしている撮影現場までやってきた。
スタッフさんたちがせわしなく動いてるのを横目にその子は言う。
「うん、やっぱり近寄ってみても綺麗だね。まるでモナークみたいだ」
「分かるの？　モナーク、オオカバマダラ」
「君の方こそ分かるんだ。いいね、話せる。コオロギとか飼ってないかな、秋の夜は聴いて寝るのが醍醐味だけど、まだ聞けてない」
「ごめんね、まだ飼えてないから。もっと大きくなったら色々飼いたいけど」
急な虫の話でちょっとテンション上がっちゃって、声も上がる。そういう風に見せることも、中身の高揚と混ぜればそんなに難しいこと

じゃない。
だけれど、発端はそこだった。そこからその子は、今度はちゃんとこちらに顔を向けて話し始める。
「だけれど、まだ孵化はしてないかな。モナークは孵化しかけの時でも十分美しいけれど、だけども蝶はやっぱり大きく羽根を広げてこそかな」
そう言って、私の手を引いて撮影現場、その中のカメラが向けられている所にずんずんと歩いて行く。
いや、ダメでしょって思ったけれども、周りのスタッフさんたちも止めようとはしてこなかった。むしろ笑っている人だっている。また助監督の指導が始まったなんて声も聞こえて、これがよくあることなんだとも思った、実際は気に入った人にしかしなかったみたいなんだけれどね。
そこからは、私だけじゃできなかった技術と知識の吸収の時間だった。
監督の思考。カメラマンの配置、意図。美術の意味。音楽の意図。そしてそれらの人が使う道具についてもその子は説明してくれた。
どんどんと、その時間だけで私の仮面が彩られて作りあがっていく。
私が、私と言う皮を被っていくのが良く分かる。
百城千世子が被る百城千世子という仮面はその子によってその時出来たんだって、今でもそう思うんだ。
色々話してくれた、最後の仕上げとでもいう風にその子は、今まで教えた事全部を飲み込んだ私に、多分備品として用意されてたハンディカメラを借りて、私の方に向ける。
「じゃあ、ちょっとやってみる？」
「いいけど、キミが撮るの？」
「うん、私はホントはこっちがやりたい人だしね。それじゃ、さっきまで言ってた事と、それまで君が作り上げたものを合わせてやってみてよ」
スパルタだなぁ、って思ったけれど本番前の仕上げには丁度いいの

かなって、その子とカメラ越しに目を合わせる。
「あぁ、だけどね」
――？
「今まで教えた事全部、僕が補うから。　千世子ちゃんはただ演じてくれればいい」
そう言って、その子が手製っぽいカチンコを鳴らした時。
『私の世界が切り取られた』
それは、ずっと見てきたような作り物の世界に他ならなかった。ずっと気にしてきた視線が、一つも感じられない。
表情の作り方をまず覚えた。次に言葉の選び方を揃えた。次は服装をイメージ通りに誂えることにした。すると所作もそれについてきた。服に合わせて体型も考え拵えるようになっていった。
そういった百城千世子が望まれる姿を作り上げるに至った全部が、抜け落ちる。
ただ、そこにあったのは私だけだった。どこまでも自由で、束縛なく、私がただ私である空間。
思わず、声を上げそうになった。今まで怖かったものが全部抜け落ちて、ただただ私が私である幸福だけを享受できるようになったから。
これがその子が最後に言っていた事！　私の思う全てをカバーして、まるで強すぎる日差しを大きな菩提樹が覆ってくれたような、強烈なまでの安心感が私を包み込んでくれる。そのままゆったりと眠ってしまえそうな。
だけど、そうじゃない。私は、それだけでいいなんて聞いていない。
私は、役者として、彼に言われたことをやり遂げなくちゃいけないんだから。
演じてほしいって言っていたから、どうすればいいのかは分かる。切り取られてもここはさっきまでの撮影現場のスタジオキットの上なんだから、私の演技はＣＭで望まれている事。
子ども一人一人が、その子のためにある花を摘んで、香りに包まれている、そういう図。

ほら、演じなきゃと思ったら一つだけ私を見る目が見えてきた。あれが彼の目、彼が向いている方向。
だから、精一杯の演技を。
私は、心の底(百城千世子)からの笑顔を浮かべた(作り上げた)。
カチンコが鳴る。全てが、視線も含めて戻ってくる。それでも私が気になるのはハンディカメラを持ってこちらにやってくる彼だ。
今まではどこか眠そうだった特徴の薄い顔が、上気して笑みを浮かべていて、こんなに目立つような顔をする子だったかな、なんて思う。
「ほら、見てみなよ。　千世子ちゃんの笑顔、まるで天使みたいだ」
「そうだね。そんな風に笑ったし。ところで、名前」
「そりゃ周りのスタッフさんみんな言ってるから分かるよ。それよりもさ、これ」
笑顔でハンディカメラに映された私の演技を見せてくるけれど、それよりも私は初めて見る彼の横顔を盗み見ていた。だって、今でも思うんだけどほんと見れる時が少ないのだもの。
「私の笑顔が天使みたいならさ」
「うん？」
「キミの横顔は、まるで神様みたいだね」

あは、照れた。

その後すぐに彼は子役を辞めちゃったけれど、私が彼から教わったことは全部私の糧となって、私という仮面を形作ってくれた。
仮面の効果はすぐに数字という分かりやすい結果になって表れて、大衆のための仮面の強度を上げれば上げるほど、私は一人になっていく気もした。
でも、私の仮面は沢山の糧の元で作られたものだから、それでもいいと思える私は、きっと女優に向いているのだと思う。
時々、当時の彼が撮った映像を見た監督さんやカメラマンの人達が、どうにかして私の仮面の裏側を撮ろうとしてくるのはちょっと癪だったけれど、でもそんな人たちも今の仮面で満足すれば、もう探ろ

うとはしなくなった。
　そうして１０年がたった後、彼は急に戻ってきた。
「久しぶり。でも、『こっち』なんだね？」
「久しぶり。色々やってみたけれど、まずは役者としての視点の補完からかなって」
「へー、じゃあいつかは？」
「勿論、あっちに座るようになるよ」
　１０年ぶりに会った彼は、なんというかそのまま育ったんだね感が凄くて変わんないなぁって、思わず笑っちゃいそうな跳ねた髪と眠そうな顔は相変わらず。
　だけど背は伸びたなぁ、でもアキラ君の方が高いかな？
　彼があっちと指をさしたのは、手塚監督がいる方向。まぁそうだろうね。
　女優が天職の私が百城千世子としてこの世界で生きているように、あの時私の素顔と仮面を取ったキミがあちらに行くのは、当たり前だ。
　あぁでも、それならキミはきっと私を使うだろうし、アリサさんにちょっとお願いしてスケジュールの都合作るようにしないといけないかも。
「やぁ、久しぶりだね助監督くん！　早速だけど本番一発撮りを目指しても大丈夫かな？　オーディションの形式から新人さんの可能性もあったけれど、君なら大丈夫だろう」
「お久しぶりです、手塚監督。あと、オフィスｂｅａｍの俳優として来てますから助監督は今の所勘弁してください。あちらのスポンサーさんが変な顔してます」
　指をさされたからかな、手塚監督がこっちに来た。この監督も監督で、スターズの中では一番私の素顔に執着していた人。普段は手堅いのに、やれるところでは結構突っ込んでくる、いわゆる熱い人なのかな。でも、サングラスは似合ってない。
「私の方は大丈夫だよ、キミも、ね？」
「千世子ちゃんがそう言って、首を横に振れる人はいないんじゃない

かな」
「じゃあ、よろしく頼むよ。　それと、映すカメラの方も穂積君にやってもらうからそのつもりで頼むよ」
ほら、こういう時を絶対に逃がさない。
今回のＣＭは、冴えない風体のカメラマンが恋人を綺麗に撮ろうとするんだけど、用意と手際の悪いカメラマンは四苦八苦。それを見て笑っていた恋人の女の子の方がふと窓の方を見た時に、一陣の風が吹く。その姿を、ようやく用意できたカメラマンがパシャリ。恋人の綺麗さとようやく撮れたベストショットに唖然とする姿で終わりだ。
手塚監督が言っていることは、後撮りでカメラに写った私の写真を用意するところを、カメラが回ったまま彼が撮った写真を、そのままＣＭに起用するということ。
あは、彼の方は驚いてないけれど周りのスタッフさんの一部が驚いてるや。そうだよね、一般オーディションで取った子に撮影の一部まで任せるなんて狂気の沙汰だよ。
でも、助監督のあだ名を知っているスタッフさんは当たり前のように受け入れている。この空気を十年前には作ったんだから、キミは本当に、もう。
本当に、キミがあちらに回ったらどんなものが撮れるんだろうなぁって、柄でもないんだけど。
少しだけ、ワクワクしちゃった。
今日もキミにカメラを向けられるけれど、流石に誰かに促されて向けられるものじゃあ成長した私はあの日みたいな顔はしてあげられないなぁ、ゴメンね手塚監督。
もっとキミが、私だけをそのカメラで見つめるような時には、分かんないけどね？
それまでは、キミが教えて私が作り上げた、私の仮面に見惚れてしまうといいよ。

みなさんこんにちは。初っ端が嵐だったけど超えたら順風満帆走

者の鑑なＲＴＡはーじまーるよー！　オリチャー？　見ない顔ですねぇ……

前回の続きから、千世子ちゃんと少し話してさぁ本番だと意気込んだところでしたが、ここで手塚監督の方から待ったがかかりました。

これは所謂ランダムイベントです、大抵はオーディション組ではなくスターズに所属したり企業組だったりした時に起こる物ですが、ホモ君は元子役の経歴持ちですのでそちらの方で引っかかったのかもしれません。

大抵は、契約以外の業務を報酬上乗せでお願いされたり、何かしらの課題と一緒に次のオーディションの特別枠を融通されたりするものなのですが……ここでデスアイランドの特別枠が取れたら嬉しいのですが、残念ながら報酬は成功した後に明かされます。現実なら絶対許されないゾ。

ともあれお願いされることはなーにかなーと……ファッ!?　カメラ撮影!?

なんだお前神か何かか手塚監督！　監督志望ホモ君が序盤で撮影スキルを磨ける機会は本当に少なく、その為に『無念無想』で日ごろからちびちび貯めていくチャートを選択していました。しかしここである程度稼げると予定していたものの一部をそのまま脚本に回すことが出来ます！　これはチャートよりもタイムを縮められる可能性出てきましたね、俄然私の気力もうなぎ上りです、ホモ君も二言もなく承知しました。

それではランダムイベントが入りましたが本番です、、イクゾー！

デッデッデデデデ！

はい、演技ａｃｔはもう『メソッド演技』のおかげでやりやすいにも程があるところですが、このカメラを使って写真を撮る所はそういったアビリティが育ってないので気を抜けません。等速に戻して、と。

まぁ等速に戻したのはそれだけじゃないんですけどね。このゲーム、基本的にＤＬＣ入れた後は相手のステータスがどのくらいなのかは、かなり仲良くなっていたり趣味やトレーニングを一緒にして伸び

るスキルなどから大まかに把握するしかないのです、が！

監督志望であったり、カメラマンであったりすると習得できるアビリティの中に、カメラ越しに覗いた時に相手のステータスが朧気に見えるものがあるのです、ほんの少しだけですけど。

これは恐らく、監督ルートで原作キャラが出る舞台や映画にモブキャラだけで対抗することも出来るために、そういったモブのステータスを探る方法もないと暗中模索過ぎるので追加されたのだと思います。なおアビリティ名は『シャッタースキャン』、シャッター部分無ければいつでも見れるんじゃないですかね（辛辣）

と、いうわけで写真ａｃｔもパーフェクトにこなしてみせて、さーて見えるチョコエルのステータスは……

……え？

いやちょっと待ってください、いま凄いエグい伸びしていたステータスが見えたような……具体的には羅刹女終了後の千世子ちゃんに並びそうな……

こ、これはもしや怪獣王に対抗するように大天使チョコエルのステータスは増減すると言われていたのがワザップではなくガチップだった可能性が!?

……いや、でも別に困ることはないですね。羅刹女にしたってホモ君はこれからのランダムイベント次第ではありますが、劇団天球に関わるか関わらないか辺りで監督スキル上げにＰＶやＭＶ取ったりする仕事にシフトしていきますので、羅刹女の舞台にどちらの側にも立たないようにチャートをくみ上げています。

これがもし夜凪ちゃん側に立つ場合のチャートだったら、ライバル天使の伸びに恐怖を覚える所なんですが、今回のホモ君は監督です。むしろ将来的に夜凪ちゃんも千世子ちゃんも使う側に回りますので強くなる分には無問題！　興行収入どれくらい入るか楽しみになりますねぇ！　……契約金いくらになるのか気が重くなりますねぇ（小声）

ちなみに羅刹女なんですが、もし俳優ルートで夜凪ちゃんと付き合った後に、ヒゲの策略で千世子ちゃん側の孫悟空をやる事になった

場合、夜凪ちゃんの羅刹女がそれはもう凄いことになります。圧巻なのでぜひ各自やってみてください、私はトイレいけなくなりました。

それでは本番も終わりましたので、後は後日の追加報酬が何だったのかを期待しながら帰る事としましょう。

千世子ちゃんとも会えましたし、ばっちり『百式演技術』はアビリティ欄にあります。好感度については……天使状態だとどうしても異性だった場合一定ラインで止まりますからね、キミ呼びで名前は呼ばれませんでしたが大丈夫です。デスアイランド編で少し稼げばラインに乗って安定しますからね。

もしこれが幼馴染ルートでキミ呼びだった場合は、アキラ君よりも親しい幼馴染である可能性が高いので注意が必要（3敗）ですが、今回の初期知人はすーぱー安牌、茜ちゃんですから安心です！

それに前パートで説明できませんでしたが、本日は夜凪ちゃんがヒゲと邂逅する曜日ですからね！　本来は、最終選考に呼び出されてからヒゲの勧誘なんですが、初期の時点で夜凪ちゃんが一定以上育っていると、オーディションの後でヒゲが、その日のうちに夜凪ちゃんに車アタック（直喩）をかけることが下調べで分かっていますので、その通りに動きましょう。

それではバイノハヤサデー、ってあれ？　千世子ちゃんから夕食のお誘いが来ました？　どうやら手塚監督がホモ君の子役時代の事もあり、せっかくだからと企画してくれたようですね。それに千世子ちゃんも、予定では新人さんが来ることも見越して多めに時間を取ってくれていた事から、参加する余裕があるみたいです。

うーん……これは悩みどころですね。手塚監督の好感度は稼いでおくとデスアイランドの撮影時に、ある程度無茶なことをお願いしてもオーケー出してくれたりとメリットはあるのですが千世子ちゃんの好感度は夜凪ちゃんがいるのでそこまで必要ではないですし……

って、画面の端の方に星アキラ君がいらっしゃいますねぇ！　千世子ちゃんの送り迎えについてくる事が多いですが、もしや今回もそのパターン……と、いうことはその夕食にアキラ君も来る？　そういうわけですね？

じゃあご馳走になりましょうか！（掌ドリル）
アキラ君は普段から見られている役者のようなムーブを気にかけてくれていますからね～
一緒にいる時間が長ければ長いほどそこから学べる演技スキルの把握も進みます。千世子ちゃんと一緒に出てきた場合のアキラ君はボーナスステージ！
まぁヒゲとの邂逅は夜凪ちゃんの傍にいればいつでもできますからね、今回は御縁が無かったという事で……
あれ、茜ちゃんからメールが入ってますね？

『夜凪ちゃんやけど、なんか映画監督さんの所からオファーかかったみたいなんよ。
でも、相手さんが怪しかったからウチの事務所に入るって言っちゃったみたいなん。
向こうさんもその事でお話したいみたいやから、お仕事終わったら連絡ちょうだいな～』

……

オ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
!!!???!?

Ｓｃｅｎｅ５『走者は二兎を追う（捕まえられるとは言ってない）』

『夜凪ちゃんやけど、なんか映画監督さんの所からオファーかかったみたいなんよ。

でも、相手さんが怪しかったからウチの事務所に入るって言っちゃったみたいなん。

向こうさんもその事でお話したいみたいやから、お仕事終わったら連絡ちょうだいな～』

ンンンン…ンンンンン…．ンンンンンンンッッッッッッ!!

オ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!!

……

何度叫んでも画面は変わりませんね、はい。ええ……ウッソだろ……

ここにきて夜凪ちゃんと黒山墨字ことヒゲ監督の合流失敗ってどういうことなんだってばよ！（錯乱）

いやまだだ！　負けてない！　負けるわけがない！　負けるわけがない！（ＨＯＪ並感）

いくらプリセット走法だと言ってもここまで生まれと初期知人が揃ってる引きは中々ないんですよ！　続行です！

それに、この文面だと茜ちゃんが恐らく間に少しは入ってもらったようですし最悪のパターンは引いてないはずです。最悪の場合だと夜凪ちゃんが意地になって絶対スタジオ大黒天には所属しなくなりますが、向こうとの話を引き出してるという事は夜凪ちゃんもそこは承知してくれてるのでしょう、絶対やだ！　って言っていたら茜ちゃんがそこをメールに送ってこないとは思えませんからね。

と、なれば……一先ずは夜凪ちゃんにもヒゲ監督にも頭を冷やしてもらうという事で今日のお話はなしです。現在の時刻は既に１８時を回っています、スタジオと千世子ちゃんのスケジュールの影響でこんな時間なわけですが、ある意味いい塩梅に働きましたね。

ではいつやるか……は、明日の朝一番がいいでしょうね。今日やるのは非常識と頭冷やしてもらうということで断れても、ヒゲの事ですから一般良識社会人の理屈が通用しないでしょうし。

下手すると原作通り途中で夜凪ちゃん拉致る可能性も高いです、こちらから時間指定してお話に臨むことにしましょう。

天使やカメレオンと渡り合うためにも夜凪ちゃん育ててもらうのは確定なんでスタジオ大黒天と喧嘩別れというのは駄目ですしね。ホモ君の監督スキル向上のためにも（人間の屑）

それではさっそく茜ちゃんにメールを返しまして、と……スタジオｂｅａｍの次の仕事の為にも、って追加しておきましょうか。

デスアイランド編で夜凪ちゃんと茜ちゃんはスターズ枠の方に混ざれたりはしないので、必ずオーディションを受ける必要がありますし。ちなみにホモ君は監督ではなくアキラ君や千世子ちゃんと友好を深めている場合だと、何かと忙しいスターズの面々なのでスケジュール調整のために、乱数次第ですが1つ枠が出来る事になると入れてくれます。

今回のホモ君はそこまでじゃないので、普通に監督に媚び売って引っかかるようにしておきましょうね～世の中コネだよコネ！

と、いうわけで夜凪ちゃん……はまだスマホ持ってないですね。茜ちゃんに夜凪ちゃんの家族ごと連れて多分あるだろう事務所に避難させてもいいよ、と一緒に伝えましょう。

これまでの流れで分かる通り、この後は夕食会の方に参加です。もう返事しちゃいましたし約束は守る、当たり前だよなぁ？　というのも半分ありますが、もう半分はホモ君のステータスにあります。

と、いうのもホモ君はまだ器用貧乏なステをしてますので、俳優ＲＴＡに使われるようなメソッド演技に耐えうる精神力なんかは一切磨いてはいません。それでも豆腐メンタルとかではなく、平均は普通に越してるんですけどね。

でも強みとまではいきません。もしですが、これ以上『メソッド演技』の習熟度を上げた場合なんかは短期間はともかく中期的以上に使用すると夜凪ちゃんの比でなく戻ってこられない可能性が高いです。

なるだけここぞという時以外はプレイヤースキルで乗り切る事を考えます。その為の『百式演技術』でもありますが。
まぁオーディションではバンバン使っていきますけどね！　オーディションは一回こっきりで長くやらない為、一気に演技ａｃｔのスコアが伸びる『メソッド演技』はうま味、死ななきゃ安い（走者の鑑）
まぁその辺は演技の話なので置いておきまして、なぜ精神力が高くない事が今日夜凪ちゃんに会わない理由かと言うと……
男って女の涙と勢いに弱いよね（ノンケ）
そういう事です、夜凪ちゃんのあの、友達との距離感の分からないぐいぐい来るのがそのままホモ君に向けられた場合、そのままホモ君のオフィスｂｅａｍに所属する事を承諾しかねないのです。
普通は迫られたところで事務所の社長が決めることなんですが、実質ホモ君の芸能事務所なので一番上はホモ君です、ホモ君が陥落したらそこでチャート全損！　そして相手はゴジラのポテンシャルを持つ超美人、ノンケが勝てるわけないだろ！
なので、茜ちゃんに任せて明日以降にスタジオ大黒天と交渉が現状ベストというわけです。一応夜凪ちゃんがオフィスｂｅａｍに所属して、そのままスタジオ大黒天に出向という形も取れなくはないですが、ヒゲ監督が承諾するか分からないんですよね……なので基本は原作と同じく柊さんに未婚の子持ち母状態になってもらいましょう。
それでは場所を移動しますが……うわぁ、急遽決まった感じなのにそこそこ良い焼肉屋だぁ。スターズは流石ですね、ホモ君むっちゃ羨ましい……いやいきなりだったのにいい店連れてこられて、親しいとまで言える人がいないホモ君の精神ちょっと削られてますね、やっぱ羨ましくないです。
どちらにしても今回の食事会ではアキラ君と手塚監督と仲良くなる事が第一、天使は夜凪ちゃんが近い位置にいるのでデスアイランド編までに少し上げる程度に留めます。
それではスターズの面々とお食事会に、イクゾー！　デッデッデデデデ（カーン）

百城千世子の現場が長引かないのはスターズに所属、または下請けを行うスタッフの間では常識である。そのために、今回のＣＭ撮影で予定されていた時間も、オーディションで選ばれた新人への説明とリハーサル、そして何度かＮＧを出すことを想定して確保された時間であった事は承知している。

だが、現実は全くの素人というわけでもない元子役がオーディションで合格したバイプレイヤーとしてやってきて、撮影現場にも子役時代の事を知るベテランがいたこともあり、百城千世子だけならともかく、他の共演者がいる中での本番一発撮りが敢行された事が思った以上の空き時間を作ることになった。

予想外の事態であるが、だからといって悪い事ではない。そのまま早く終わった分の時間をどう使うかという話になるところで、手塚監督から折角だからと良い時間だし、このまま夕ご飯と洒落こもうという提案が出る。

それに千世子くんが賛成した時点で、もう場の空気は固定されたようなものだ。手塚監督が撮影所近くという事もあり、ある程度団体が急に入ってくることも想定されている焼肉店に予約を取って、そのままスタッフごと流れ込んだ……

「――って、言うのが流れかな、アキラ君」

「あはは……なんていうか、千世子くんは流石だなぁ」

撮影の上がりに、ついでという事で千世子くんの撮影も終わっていたら送迎も一緒に、と考えていた僕、星アキラは、いざその撮影所についたらあれよあれよという間に焼肉に連れていかれ、送迎の運転手に待ってもらわなくていいという事を伝えるのが精一杯だった。

そうして来ちゃった焼肉店では手前側の座敷に撮影スタッフ、奥の座敷に役者と監督という風に一応配慮された座席にはなっているが、実質店の座敷を貸し切りしている。

「パッと貸し切りにしちゃう当たり芸能界のお金の使い具合凄いよね、元子役とはいえその辺のお財布感覚は普通だからさ……」

「お金の使いどころは間違えないのがいい会社だよ、勿論慰労のお金と旧交を深めるためのお金はケチる所じゃあないさ、穂積君」

コップを握って少し前までぷるぷるしていた穂積君は、手塚監督がそう言って初めてリラックスした風に肩を落とした。もしかしたら、諦めただけなのかもしれない。

ただ、追加の焼肉が来る前から何杯目かのビールを飲んでご機嫌な手塚監督を尻目に、ここからどうしようかと僕は考えざるを得ない。

星アキラにとっての穂積元就は、よく話は聞いていたけれど、実際に会ったことは無い昔の知人という微妙な間柄だから。

僕にとって彼の、穂積元就という元子役について知っている事は幼馴染の千世子くんの話と、子役時代のスタッフさんが言っていた事、そして母さんがポツリとこぼした言葉だけで構成されている。

千世子くんからは最初のファンとして。今の千世子くんを形作る際にお世話になったという事と、そのあと一番初めにサインを描いた相手としていつもの笑顔で楽しそうに話すのを聞いたことがある。

スタッフさん達からは子役としての手本として。撮りやすい子どもとして有名だったことと、撮影現場でよくウロチョロしていたという事を懐かしそうに話すのを聞いたことがある。

そして母さんからは、当たり前のように役者の才能がない事と……いつかまた戻ってくるだろう事を、つい零れたようにつぶやいたのを聞いたことがある。

ただそれだけの関係だからこそ、少しの興味と少しの親近感、そして少しの劣等感だけが今の彼について持っていることだ、端的に言って話すことが無くて少し気まずい。

何か会話、会話のタネを……と探すのは向こうも同じのようで、さっきまではいた千世子くんがいる時は触ってなかったスマートフォンを気にする姿が目につくようになる。ちなみに千世子くんは他の座敷にあいさつ回りに行っている。

「もしかして、結構無理をしてきてくれたのかな？」

「ああ、いやこれはもう済んだ事なんだ。ただやっぱり気になることは気になってね」

「悩み事なら、聞けなくもないけど」

「うーん……たとえ話で言うとだけど。品評会に出した日本刀が、審

査員のトップに気に入られなくて落選したんだけど、審査員の刀鍛冶兼刀評論家には気に入られて、その人に研ぎに出してもらおうと思ってたら、その人切りつけて自分の鞘に戻ってきた……って感じ？」
……妖刀かな？
「ごめん、さっぱり分からない」
「だよね、自分で言って混乱しているんだと思う。どちらにしても、もうどうするかの手は打ったからそれ待ち」
「なんとかなったんだ!?」
「なんとかするんだよなぁ……」
急にどんよりとした空気を醸し出した穂積くん、跳ねていた髪まで沈んでいくような彼に対してこういう時にどうすればいいのかなんてさっと思いつかない自分と、千世子くんならなんとか出来るのだろうという自分とが混在してしまうのも、多分穂積くんに感じているもののせい。
穂積くんは役者としては僕と一緒だ、光るものが無い。それは幼馴染も、母さんも言っていて、なにより一番近くで天才を見続けた僕としても、なんとなくそうなんだと思わざるを得ない。だから、それでも役者として戻ってきた彼に興味と親近感を禁じ得ない。
そして、そんな彼に劣等感を覚えているのは、彼を千世子くんが待っていたことなんだろう。千世子くんは誰しもが言う様に天使として作り上げているけれど、中身まで天使のように人の事を気にしていないわけなんかじゃない。
僕の仕事をとることになった時も、彼女は僕に謝っていたんだ。しょうがないと僕自身が思うことで、悔しいと思うことで。
だけど、例えば僕が役者を辞めて、そして復帰した時にも彼女は待っていてくれるだろうか。才能ある人に、その帰還を待ちわびてもらえるだろうか。
「アキラ君」
「っ、なんだい？」
「私は監督志望なんだけど、アキラ君の契約金っていくら？」
色々と考えてしまっていた事に気づかれたと思ったら、なんだかと

んでもない事を穂積くんが言い出した。契約金って……監督志望、って言うなら、もしかして出演料のことなのかな？
「えーと、一日当たりの出演料なら言えるけど、僕一人で言えることでもなくて」
「あー……違う、違う。こう思われるからもっと知名度、信用が欲しくて役者に戻ってきたんだけどな」
「私が言ってるのは、スターズからこっちに来る契約金。でも高いんだろうなぁ、王賀美さんの事もあるし」
「……何を、言っているのか」
「――僕はね、アキラ君。見栄でも無意識でも才能腐らせるヤツが大嫌いだ。僕の分野で、僕の映画に出てこれる役者が、気づかずに日の目を見ないのも大嫌いだ。それを本人が望むも望まざるも関係なく、だ」
「……」
「分かるかなアキラ君、才能に気付いていないキミに言ってるんだぜ。役者としての僕のライバルはキミなんだから」
……この人は、いったい何を言っているんだ？　才能だって？　そんなものが僕に無いことは、ほかならぬ僕が一番分かっているというのに。
僕を据わった目で見つめてくる穂積くん、そういう目で見てくる人は今までいなかったわけじゃない。だけど、確かにその目から伝わってくる感情は嫉妬だった。
だとすれば、今までの人達と一緒でどれだけ的外れなんだろうか。
星アリサの息子に生まれて、容姿が良かったからと言って、役者として生きるのに何が良かったというのだろうか。その事の無意味さは、僕は１０才の時に既に母さんから直に伝えられている。同時に役者に向いていないことだって。
スタッフさんや同業者の方には、威勢がいいとよく言われる。でも本当は違う、僕がよく決意を口にするのは覚悟を決めたり気合をいれたりするためではない。逃げ出してしまいそうになる自分を無理やり繋ぎ止める為だ。

僕は、僕が才能あふれる人に勝てない、届かない事を知っている。そしてそんな人達よりも、世間の評価を得てしまっていることに空しさも覚えてる。どれも、僕にとって不幸なことだ。

そんな、僕に……才能がある？

「……ほらな、何もいってくれない」

「え……？」

口を開こうとしたところだった。何を言っているんだと言い返すところだった。

だけど、さっきまでこちらを睨んでいた穂積くんはもう、いなかった。

今目の前にいるのは、ただただ何もない所を諦めたように見つめている姿。

いつかの、千世子くんの看板を見上げているときの僕のような。

「分かっているんだよ、今の僕が言ったって誰にも響かない。それはそうだ、僕は元子役でしかないただの一般人だ、最近復帰しただけの。だから何を言ったってそれを裏付ける根拠がない、いや根拠ならあるさ。僕だ、僕がそう思うんだ、最高の映画を撮りたい僕が僕の映画に相応しいって言ってるんだそれ以上になにがあるのさ」

「いや、その……穂積くん、僕は」

「だけどそれじゃあ誰も信じてくれない。目に見えるものが必要だ、どんな知名度でもいい。腕だって足りてないんだ、天才と言われる演出家に脚本家、監督には及ばない。だから自分の持てる技術は全部覚えて、全部映画に活かしてやると決めたんだよ」

「穂積くん？　聞いてるかな、僕は」

「だからこそ、役者もやり始めたっていうのになんでまだ実績がつめてない時にそういう顔した奴が来るかなぁ！　聞いてるのか星アキラ！　というか同い年ならまだ子役やってる頃に見学で顔見せろよな星アキラ！　もっと日朝系じゃなくて普通の教育番組とかエキストラ系の方にも、だったら会えててそれを見逃さなかったぞぼかぁ！」

「話を聞いてくれないか穂積くん!?　いまの君が何だかんだ初対面同

士の僕たちとしては異様に距離の近い失礼な会話をしていることに気が付いてほしいのだけど！」
　捲し立てられるように話されているけれど、それが虚空を見続けながら僕に向けて話されているという状況じゃなければまだ聞けていたよ！
　というか、目が据わっていると思っていたけれど、あれ据わったというよりは打ち上げでお酒飲んだスタッフさんたちがするような……いやでも、彼がビールに手を付けているところは見なかったけど、いやでも大分顔赤いな!?
「手塚監督!?　穂積くんが飲んでいるものってノンアルコールですよね、僕と同い年ですから未成年のはずなんですけど」
「スターズ所属監督の前で引き抜きがどうとかやり始めたから、旧交も鑑みて黙ってたんだけどね……いやぁ、ちゃんと飲んでたのはウーロン茶だったよ。ここにはウーロンハイもないからその辺の間違いは無いし、これから役者復帰する子にそういうスキャンダルを背負わす事は絶対に防ぐさ」
「じゃあ、今の穂積くんのありさまは……」
「『場酔い』ってやつだろうね、いや……こんなにひどいのは僕も初めて見たけれど」
　ば、場酔いだって？　一滴もお酒を飲んでいないのにここまで良く見た酔っ払いの様になれるものなのだろうか。　まるでそうした役に入り切ったかのように、今も穂積くんは虚空を見上げたまま、憑依合体厳裕次郎だの天地を生贄に山野上を召喚だの、もはや良く分からない言葉を延々としゃべる置物のような存在となっている。
　ゆっくりと、手塚監督と目を見合わせる。監督は、もう駄目だとばかりに首を横に振った。良かった、こんな事だけど心が通じ合ったみたいで。なんだか彼に対してさっきまで感じていた不快感まで流されていくようだった。
「しかし、これはもう送ってあげた方がいいかもしれないねぇ。契約の際に事務所の方は分かっているから、そちらに送り届ければいいだろうけど」

「あ、都内だったら僕の方で」
「いやいや、交通費支給ってやってるから帰宅する際にそこを払ってないのはマズい。こっちでタクシー呼んで届けてもらうよ」
「ふーん、こっちはこんなになってたんだ。ひどいなぁ、私がいないときに面白くしちゃって」
「千世子くん、戻ってきたのか」
　穂積くんをどうやって帰そうか、その話をしている途中に帰ってこられてしまったか。流石に今のぶつぶつ喋る人形とも置物ともつかない格好の彼を、この集まりでは友人だろう千世子くんに見られるのは嫌だろうし、その事態は避けようかと思っていたのだったけれど。
　とことこと軽い足音であいさつ回りに行く前に座っていた穂積くんの隣の席に向かう千代子くん、だけど、なんとなく来たタイミングが不自然の気がする、まるで――
「ねえ、アキラ君のことは欲しがっていたけれど、私はいらない？」
「！」
　やはりというべきか、千世子くんは穂積くんがこうなる時にはこちらに来ていたのか。その時に声をかけたりしなかったのは、多分僕の、今は場酔いしているから酔っ払いの戯言なんだろうと思うけれど、中々に重くなるだろう話をしていたから。千世子くんは、人に対して慮る心を持っているから。
　だからこそ、こういう時の穂積くんにかこつけて、なんてこともしないと思っていたけれど。
「ぁ、あー……千世子ちゃんはなぁ、スターズ所属が天使としての活動に丁度いいだろうし特にそれで問題は、今は起きないだろうから、考えた事はないかなぁ」
「ふーん」
　穂積くんの返す言葉は、千世子くんの期待に添えているのか添えていないのか。分からないけれども、確かにスターズの天使である千世子くんに対して母さんが、ひいてはスターズがかけている手間暇は相当なものだ。だから丁度いいというのは分かる。
　分かるけれど、今は起きない、なんて。

まるでこの先、それでは駄目なことが穂積くんには分かっているようで。
「だから、またその時に迎えに行くよ」
あれ、今、千世子くんが、いつもと違う――
「あは。　ガラスの靴を用意しておいてね」
「お姫様抱っこ映えるだろうなぁ、千世子ちゃんは……」
言い切るか否かというままに、べしゃりと穂積くんが机に突っ伏した。
けれども、僕の心はその姿を視る幼馴染に対する驚きと……やはり、という誰とも知らない冷静な声が、僕の横でした事に容量を取られてしまっていた。

オ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!!（二回目）
なんで？　なんで？　なんで？
最初の方は普通に千世子ちゃんと世間話が出来ていたのに、半ばを過ぎてさぁアキラ君に話しかけるかとなった時だというのに！
未成年だしお酒呑めないのに、どうして画面が泥酔状態と変わらない会話選択肢がバグって読めない状態になってるんですか!?
管理人！　管理人！　ステータス画面をとにかく開く！
どこにもこの状況でこんな風になるようなものなんて……『場酔い』？　ナニコレ？（ｗｉｋｉチラ）　えーと、もしかして元子役だとランダムでバッドスキルかアビリティ持ちになりますけど、それですかね。効果としてはお酒飲まなくても場の空気に呑まれて酔っちゃうやつ、打ち上げで酔うとそこでの好感度上げが捗らないのでそこそこ痛いやつですが。
でも、このホモ君は全般的にステータスは平均越えだからその辺のバッドスキルもアビリティも発現しないですから、可笑しいのですけれど――
オ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!!（三回目）

これ『現在の』精神力依存のアビリティじゃないですか！　精神バリ高というわけでもないし知り合いが少ない中大勢で高い焼肉に行ってホモ君精神削れてるから、発現まで行ってしまったというわけなの!?

マジかよ！　すべて台無しだ！　お前はすべてを台無しにする！

このＲＴＡはまるでお前の人生だ。　色んなこと（オリチャー）を始めるが、何一つガバらせず終わせられない。　誰もお前のことを愛さない。

あ、暗転した。　落ちたな（チーン）

……

スタジオ大黒天との半八百長交渉、はっじまっるよー!!!（ヤケ）

Ｓｃｅｎｅ６『ガバってばっかじゃいられない』

みなさんこんにちは。『はじめての泥酔』実績解除ＲＴＡが先ほど終わったところから再開です。

ちなみにこちらの最速は芸能家系で速攻オーディション受かってから間違えてお酒飲むのが最適解ですね、ホモ君は監督になるためにも未成年飲酒は絶対にノゥ！　なのでこの実績解除は予想外でした、なーんでチャートに書いてない事が起こるんですかねぇ（白目）

もう起こったことはしょうがないのでスタジオ大黒天との話し合いに集中ということで、事務所で目が覚めるはずなんですが、ホモ君はソファで目が覚めて……どう見てもホモ君の部屋ですねコォレハ、どういうことなの……？

いや、本棚の位置とかが違うというか、中身が資料やＤＶＤにビデオデッキまである!?　ということは事務所には間違いないですが、これは……

「起きたー？　向こうさんもうちょっとしたら来るから用意しとくんやで」

あーやっぱりですね、茜ちゃんがドアを開けてこっちに来ていますが、向こうから見えるのがホモ君のリビングです。つまり、最初は分からなかったのですがホモ君の部屋は３ＬＤＫレベルのマンションの一室であり、事務所もその一部が仕事場として設定されているようです。

つまり、メール送る際に選択肢に「いつものように事務所に泊まっていいよ」とありましたが、そこそこ夜凪ちゃんと茜ちゃんは事務所という名のホモ君の家に泊まっているようです。

……よく好感度名前呼びまで行ってないですねこのホモ君、いや、茜ちゃんと仲が良ければそこそこあり得るのかもしれません。

役作りのために仕方が無いなら阿良也さんだって嫌々ながら家に呼んだりもしましたし、その場合でも夜凪ちゃん的に信用できるアキラ君がいたから呼べたという面も原作から読めます。つまり仲の良

い人がいれば割と家に上がったり泊まったりのハードルは下がるとみました！

と、なるとホモ君が事務所側で寝ているのもベッドをルイレイに貸してるからなんでしょうね。ホモ君一人で寝るにはいささか大きいベッドでしたが双子で寝るなら丁度良いでしょう。寝る場所も提供するとかホモ君は人間の鑑。

それでは言われた通り……大学生ですから普通にスーツがありますのでそれを着ておきましょうか。

……品質がイージーオーダー並みですね。部屋の事も考えると、ホモ君は食事あれこれはそんなにお金をかけたりはしないようですが、一品ものは良いものを揃えるような癖があるようです。ＲＴＡ的にはスキル・アビリティにならないので可もなく不可もなくといったところでしょうか。

富裕の生まれでは美食家等のアビリティも付きますから、そういったものの付かないレベルでの癖はうま味もまず味もつきませんのでね。ちなみに美食家では食事に連れ出すと大抵好感度上がります、代わりに出費が激しくなるのですぐ売れる俳優でない限りお勧めしません。

それでは、ホモ君の準備も終わって待っていると茜ちゃんと、連れられて夜凪ちゃんもやってきました。茜ちゃんもスーツを着てますね、まぁこれは制服がある夜凪ちゃんと違って未成年でも学校に行っていない俳優なので、お金に苦労はしてないだろう茜ちゃんならここは当然ですね。茜ちゃんは服のセンスもいいので割と私服でもコーディネイトがしっかりしてる方ですから、あまり関係は無いのですが。

夜凪ちゃん？　デスアイランド編の私服で察してあげましょう。

「凄いわ茜ちゃん、先輩と並ぶと社長と秘書みたい」

「じっさい私、この事務所やと副所長やからなー。所長がずっとお休みしてたけどこれで復帰するし」

茜ちゃん原作と比べて余裕生まれまくりでは？　お仕事自体もオフィスｂｅａｍのサイト探す際に出演作なんかも出てますから分か

るんですが、そこそこ脇役とはいえネットドラマ系や映画にも出ています。これはステータスの成長も期待できますねぇ！
それにしても、ホモ君も周りが高すぎるので霞むとはいえ単体でみればイケメンの類、イージーオーダーのスーツと併せて服に着られてる感もなく、茜ちゃんとのツーショットがいい感じです。夜凪ちゃんも言っていますが、これで宣材写真撮れば結構依頼も来そうですねぇ……時間取るのでＲＴＡでは採用しませんが。
さて、それではスタジオ大黒天を迎え入れる準備をして、イクゾー！

「先輩！　私を先輩の芸能事務所に入れて、お願い！　私はもうこの人が生理的に無理なのよ！」

ヒゲエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!!!
このヒゲエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!!
スタジオ大黒天との顔合わせと夜凪ちゃん所属問題でしたが、つい先ほどまでは上手くいっていました。最初の出会いもヒゲこと黒山監督と万能お母さん（未婚未出産）こと柊さんもホモ君のお家兼事務所にやってきて、ホモ君も茜ちゃんも若いながらもしっかりと服装正して交渉に臨んでいましたからね、特に侮られたりはしませんでした。
そのあとはお茶を出して、いやはや夜凪ちゃんに目をつけるとはお目が高い彼女は私達も才能があると思ってましてこちらで磨きつつも～～なんて話に持っていき、黒山監督についても知ってますよアピールをしっかりこなしました。
これやっておかないと、黒山監督は日本で売れているかどうかはさておき、監督志望としては知ってないとおかしいレベルですからね。三大映画祭で監督賞は普通に偉業です。ただの客なら知らなくてもしょうがないですが、演劇界でいう巌さんみたいなものなので知らないとその筋の人としては落第、しっかりアピールしましょう（２敗）
なお茜ちゃんと夜凪ちゃんは確定で知りません。千世子ちゃんは

知ってますしスターズの面々なら六割以上で知ってます、もし俳優ルートで知っておきたい場合は芸能家系か親戚に監督を置きましょう。それ以外では……映画マニアならなんとか、ですかねぇ。

それはさておき、ホモ君の実家の話も交えて柊さんの目に金という文字が見え始め、夜凪ちゃんの成長のためにはスタジオ大黒天の方がいいかもね、仕事も持ってこれるしそこは大丈夫ですよね？　とヒゲに確認を取りちゃんと取ってこれると明言させました。

夜凪ちゃんも原作よりマシとはいえ役者としてすぐに仕事あるよ、というのは中々魅力的に思えるでしょう。徐々に向こうに心が傾いていっているのが見えます見えます（幻視）

と、ここまでは良かったです。ですが柊さんが夜凪ちゃんに気持ちを聞いちゃったのが終わりの始まりでした。

「あの、すごく魅力的ですけど。私は茜ちゃんや先輩から学びたいことも」

「何言ってんだ。お前がそこの二人から学ぶことはもうないだろ」

そうだよ（肯定）　そうなんだけどさぁヒゲェ……！

柊さんとしては自分で選んでほしかったのでしょう。なので、夜凪ちゃんに聞いたのでしょうが、そこで夜凪ちゃんはホモ君や茜ちゃんから学びたいこともあると言い始めました。

そしてつい口に出たとかではなく、確信犯で出たのが続くのがヒゲの言葉です。これでまだ自制が利いているというのが怖い所ですね、実際に夜凪ちゃんが千世子ちゃんと友達になったという事を把握していても身内しかいない所では普通に糞呼ばわりしていますし。

ただ、抑えてようがいまいが夜凪ちゃんとしてはいきなり向こうが友達とその友達に喧嘩ふっかけたようなものです、友達に関して許容度がガバガバな夜凪ちゃんにそんなことをすれば売り言葉に買い言葉というわけで……

そうして口喧嘩が堂々と行われた結果がこれだよ！（白目）

もう完全に夜凪ちゃんは前に恐れた怒りのままにホモ君の芸能事務所に所属しようとしています、ここで怒れる美人を落ち着かせて冷静にさせるには強靭な精神力が必要なのですが、このホモ君はそこま

での菩薩じみた精神力は持っていません。
そしてこの夜凪ちゃんはホモ君たちとのＴＲＰＧである程度、羅刹女の頃のような雰囲気を醸し出す事が出来るようになっているので、確定でホモ君が耐えられるわけもなく……
＞あなたは目の前の夜凪の勢いに呑まれてしまった。
＞呑まれてしまったあなたは思わず、夜凪の提案に対して頷きを返す
＞夜凪　景は『オフィスｂｅａｍ』所属となった。

ああああああああああああああああ!!!
ああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!（発狂）
チャートが、ちゃーと、どうして、こんな、むざんな……なんびゃっかいもはしってつくっためんみつなちゃーとが、おとをたててくずれて、すいせいがひかる……

＞あなたは、事務所の一員となった夜凪に対して仕事を言い渡すことにした。

――わけがないんだよなぁ！　罠カード発動、『上司命令』！

「じゃあ、最初の仕事だ夜凪後輩。スタジオ大黒天に出向して君の役者としてのスキル全てを磨いて来なさい」
ただのボンボンってだけじゃねぇな、こいつ。最初から今までの印象とは違う目をした男の評価をここで修正することになるとは思わなかった。
オフィスｂｅａｍについては既に昨晩のうちに柊が調べ終わっている。金持ちのボンボンが子役をするためだけに作られて、そのままボンボンが子役を辞めたあともそいつ繋がりで引き抜かれたのだろう咲いていない脇役役者が一人だけ所属している、零細芸能事務所。

最近になって辞めていたボンボンが復帰したようだが、見つけた子役時代の演技も、演技力自体は凡庸なものだ。
ただ、目線が違う。役者の目じゃねぇ、それが持っているのは俺達映画監督の目だ。どう撮るのかを自分で分かっているから自分が撮りやすいように動いている。演技についてもそれの延長線で、撮りたいように演技をする。
つまり、俺に言わせれば役者としてはクソだ。スターズが育てた百城千世子の演技に近いものがあるが、それよりも稚拙で、見つめている視線は一つしかない。
その目を持っているというのに、芸能界に復帰したのが役者として、というのがさらにクソだろう。もう一人の方も凡人よりだが、まだこちらの方が見込みがあるように思えた。
そういう環境だからこそ、こいつ等の下に夜凪を置いてはおけねぇと思った。ここで腐らすことを俺は俺が映画監督である以上許せねぇ。
一本の映画の為に、七十億人からたった一人を探し続けている。そういったバカのことを映画監督と呼んで、そして俺はそういうバカの一人だ。ようやく見つけた仲間を、腐らせてたまるか。
って、思ってたんだが……女子高生っていうのは物事の道理ってもんが分からねえもんだな。いや、隣の柊もすげぇ目つきでこっちを睨んでやがったから女ってもんが道理がわかんねぇのか。
どっちにしろ、向こうのボンボンが夜凪の気迫に呑まれて頷かせてしまった時点で今の段階でどうこうする事は諦めて、スターズの最終選考に無理やりでも連れ出すことを考えていたんだが。
「なっ、えっ……先輩？」
「私の事務所に入るというなら、仕事に関してえり好みをしてほしくない。だからこそ、今まで私からそういう話を持ってこなかったのだし。だけど君が、君から入るというのなら話は別だよ」
「それにね、本当にこれに関しては役者としての君が成長するために良い話なんだ」
ボンボンの目に力が宿っている、ホントにこいつさっきまで夜凪の

気迫に押されまくっていた奴かと思うような変わりようだが、俺等でありゃ分かる。
　こいつは映画監督(同類)として、自分が七十億人の中(夜)から見つけた一人(凪)を育てるという目的のために、俺を利用しようとしてやがるのだと。
「黒山墨字監督の実力については経歴から疑いようがない。そんな人(景)が君を磨いてくれる、成長の場を用意してくれる事だって、本来は幸運なんだ。ただちょっと行き違いがあったけど」
「行き違い……？」「あの怒涛の口喧嘩が行き違いやて？」
「……手が出てないからセーフ！」
　おう、分かってんなボンボン。
　実際手に持ったメガホンとかぶん投げたりしねぇ分、巌爺さんなんかと比べても俺は大分優しい方だ。さっきまでの言い合いだって夜凪自体について言及したことはない。どう考えたって優しいだろ、柊含めて分かんねぇやつが多すぎるが。
「どうあれ、夜凪後輩。君は選ばれたんだ、カンヌ国際映画祭で賞を取るような監督の目に適った」
「ならば胸を張るんだ、君が役者だというのなら」
「私や茜ちゃんがオーディションを受けて合格し、初めて日の目を見るように。役者という生き物は選ばれたことに自信を持っていなければならない」
　でしょう？　とこちらに目線で問いかけるボンボン。この場において、こいつは俺の味方だ。こいつの作った流れに乗っておくのが最上だろう、しっかりと頷いておく。
「でも先輩。私、この人とうまくやっていける気がしないわ。だって生理的に無理だもの」
「役者に無理はないよ。どんなに嫌った相手とでもラブシーンやったりするしね。だから、あくまで役者としてのスキルアップと機会の供出。その為だけの契約関係、仕事だと思っていればいい」
「私、出来るかしら……？」
「まぁ本格的に無理だってなればウチの弁護士呼んで訴訟までするから安心しとけばいいよ」

おいボンボン、お前俺の味方じゃなかったのかよ。
「どちらにしても夜凪後輩、これは君の事務所の所長としての命令でもあるし、可愛い後輩のためを思っての事でもある」
「役者になってこい、夜凪景」
こいつ、ここでも映画監督としての目とそれに準じた演技使ってやがるな。だが中身は本心か。だから相手に効果的に伝わるように細工はしてやがるが、その言葉自体は本気も本気だから、目が利くやつにも伝わる。
「ここで断ったら、役者じゃないかしら？」
「少なくとも私はそう呼んであげない」「私もやなー、むしろ私が欲しいもん」
そう、だからこいつのように金の卵には真っすぐに、効き過ぎるくらいまでに伝わるだろう。
「そうね。　じゃあ、えーと、ヒゲのおじさん」
「景ちゃん、黒山墨字さんね」
「ありがとう茜ちゃん」
売り言葉に買い言葉だった口喧嘩からは、頑なに合わされなかった目がまた合い始める。
やはり、俺の撮りたい映画には、俺の仲間にはお前が必要だ。
「黒山墨字さん。私は夜凪景、役者よ。　あなたは？」
「俺は黒山墨字、映画監督だ」
差し出した手が、がっしりと、細い手に似合わない握力で握られる。
ようやくの第一歩が、今踏み出されたと確信できた。
「ところで、ウチの役者を御社に出向させるに当たっての契約関係のお話なんですが……それと夜凪後輩、私と茜ちゃんのために怒ってくれたこと自体は嬉しかったよ、ありがとうね」
おいボンボン！　お前ここで割り込んでくるのは絶対わざとだろ！

Ｆｏｏ～！　気持ちイイ～！
いつもガバっているわけではありません、私も走者としてちゃんとリカバリースキルは持っているんですよ！
それがこれ、ホモ君の事務所に所属するようになったとしても出向という形で夜凪ちゃんをスタジオ大黒天で仕事させる方法です！
ちなみにｗｉｋｉにも載っていますが載せたのは私です（自分語り）
これによって所属しないガバの発生を不成立にし、原作沿いに物語を動かすことに成功しました、奇跡的なリカバリと言っても過言ではないでしょう（自画自賛）
ちなみに、これはあくまでスタジオ大黒天と夜凪ちゃんが一緒の席にいる時だからこそ出来た部分が大きく、もし夜凪ちゃんが昨日の時点で所属してしまった場合だと出向させることは出来ても大分好感度が削られる事になります。一度水準以下まで削られると夜凪ちゃんの嫌いな人リストに載せられることになるので、また仲良くなる事が厳しくなってそのままスタジオ大黒天に移籍するという事もあり得ます（１敗）
なので、出向させる時は必ず向こう側と夜凪ちゃんが一緒の場所にいる時だけにしましょうね！　まぁ一番いいのはそんなこと起こさない事なんですが。
さて、夜凪ちゃんの出向は決まったのでその詳細を柊さんとついでのヒゲ監督も交えて詰める事にします。その間茜ちゃんや夜凪ちゃんは大声で争っていたこともあり様子を見に来たルイとレイの相手をしてもらいましょう。
この辺の話は聞いてもあの二人は分からないからね、という体でこっちからの要求をお金でなくホモ君のスキルアップで支払ってもらう様にするためです（外道）
お給金なんかも基本はホモ君のスタジオから出て、契約金は夜凪ちゃんに直接という形を取ります、それではスタジオ大黒天にうまい話すぎるので、そこをホモ君の指導で埋めてもらうという事ですね。
明らかにヒゲ監督は顔をしかめていますが、ぶっちゃけ金銭面では美味しすぎる話です。柊さんが頭掴んで下げさせようとしています

ので、夜凪ちゃんの処遇も加えて援護しましょう。無事嫌々ながらも教えてもらえることが可能になりました。
これからは夜凪ちゃんのマネージャー染みた事もしつつ黒山監督の助手兼生徒がホモ君の立場になりますね、ここで一気に監督系スキルとアビリティを稼いでおきたいところです。
そうすれば後は銀河鉄道の夜が始まる前あたりでＰＶ撮って監督としての知名度を上げられますからね。
と、いった感じに上手くヒゲ監督の技術を盗めるようになりましたがヒゲ監督から夜凪ちゃんの他に目をかけている役者を聞かれました。
まぁ確かに夜凪ちゃん確保してたホモ君だし気になりますよね、そういうわけで原作に出て印象に残っているキャラをどんどこ挙げていきましょう。現時点で無名だろうとホモ君が目をかけているとなり、そのキャラが売れ出すとヒゲがホモ君の評価を上げます。
と、いうわけで挙げていくと最初は目が死んだのにどんどんと笑い始めまして、気が多すぎるとの評価を頂きました。でも皆魅力的だからシカタナイネ。
あとは、百城千世子を最初に挙げたのでその事も突っ込まれてますね。そこに関しては彼女の美しさは天使の仮面だけでない、ということもついでなので伝えましょう。羅刹女の時にホモ君の先見の明に震えるがいい！

「百城千世子、星アキラ、王賀美陸……このあたりまではまだミーハーだと思うだけなんだが、そこから和歌月千に烏山武光、源真咲なんて新人も出してきやがる。そして明神阿良也だけかと思いきや青田亀太郎に三坂七生と分かっているチョイス。町田リカ、堂上竜吾、白石宗に朝野市子も役者としちゃ売れてる方だが……」
「そして自分の事務所の俳優を自分も含めて言いやがった、大したタマしてるじゃねぇか」
「まぁこれから精々夜凪のためにこき使ってやるか。ついでに、ス

ターズの資料室に今度の最終選考の際に覗いてくかね。あのボンボンが初めて撮ったフィルムがあるってんなら」

Ｓｃｅｎｅ７『オリチャーは短縮の夢を見るか？』

「穂積ィ！　絵コンテは雑に切るなっつってんだろ！」
「穂積ィ！　てめぇの目にはこの現場カメラ八台あるように見えてんのか！」
「穂積ィ！　コーヒー買ってこい！」
ヒゲエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!
みなさんこんにちは。ガバを華麗なムーブで避けたところヒゲ監督のパシリＲＴＡになっているホモ君から再開です。
裏で倍速していますが、ここから夜凪ちゃんがスターズの最終面接を終えシチュー作ったり時代劇で飛び蹴りかましている最中、ずっとホモ君はヒゲの近くでＡＤ染みたことをやることになります。
ヒゲはヒゲなのでどんどんこき使われて体力と精神が削れて行きますが、体力はスキルがあるので大分余裕があり、精神も元々得意な監督業のスキルを習得しようとしているため減りが普通よりも低いですね。
かといって、適当な所で休まないと過労死ＥＮＤが待っているので所々で休暇を入れましょう（７敗）
その時は出来たら劇団天球の公演見に行くのが一番精神回復しつつ演技に使える経験値が稼げるのですが……今回はかなり運がいいですね、チケットが良く取れます。
特に公演では阿良也さんに注目していきましょう。阿良也さんの演技はホモ君が使える部分が少ないですが、被写体への理解等のスキルがどんどん稼げるのでうま味です。ただし亀太郎さんや七生さんが出てきたらそっちにフォーカスですね、こっちはそのままホモ君が演技に使えるスキルが稼げます。
ホモ君はデスアイランドが終わって、銀河鉄道の夜が講演されるころまでには監督業の方にシフトしていきますが、そこまでは役者としてスキルを磨いて経験積まないと最低限の経験取れなくて男優賞が狙えなくなりますからね。
と、いうよりもそれ以降は役者としての伸びが期待できないという

か、監督スキルの応用で映画映り、つまり映画だけはバエる演技を身につけてなんとか主演達の補助をしつつおいしい脇役の座で男優賞を掻っ攫うのが今回のホモ君です。

主役として大成するには役者としてのスキルもアビリティも素テも足りないのが現実ですからね。やっぱ才能なんだよなぁ……（ネガ）

ですが、どこでも使える役者にはなれるのがホモ君。最終的には映画で一人何役も脇役であればこなせるようになりますので、将来役者が捕まえられない場合に備えてしっかりスキルとアビリティ習得に精を出しましょう。やっぱ努力なんだよなぁ！（ポジ）

そうしてパシられつつも的確に映画というものを教えてくれる黒山墨字大監督のおかげで、みよこのホモ君のステータスを！

映画スキルがドン！　監督スキルもドン！　芸術理解アビリティ生えた！　格闘技スキルもドン！　役者スキル微動！

……………

ヒゲエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!

このヒゲエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!!!

えー、倍速されている中でお気づきのかたもいらっしゃるでしょう。

ホモ君、なぜ監督としてスキル磨いているのに役者までやってんだコラとばかりにヒゲにヘッドロックくらったり、お返しにアームロックしたり、夜凪ちゃんの飛び蹴りをヒゲに盾にされてくらったりしていました。

ちなみにくらった位置的にホモ君からは夜凪ちゃんの下着見えてますすね、そのままカモシカのような脚から繰り出される蹴りを浴びせられているのでノンケでも嬉しくないでしょうけれど。

ともかく、ヒゲ監督としてはホモ君が役者としてのスキルを磨くこと自体が無駄だからやめろという立場のようで、その時間を作らせないためにクソほど監督技術と経験を仕込んできてるようです。

見る目ありますねぇ！　でも（男優賞も取るＲＴＡだから）ダメで

す……

基本的に黒山監督はあれで結構育てるという視点では凄い人ですから、そりゃホモ君がそういう事してるなら、伸びる方伸ばし切るのが正解なの分かっているのですよね。

しかしそれでは実績が解除されません！　止められようが続行だ！

でもどうしましょうかねぇ、これ。予定ではここの空き時間で役者スキルはもう少し伸ばしていきたいところだったんですが……その分監督系の伸びは予定より三割増しで上昇していますから、そちらの技術流用でＣＭ撮影などはなんとかなるでしょうが。

デスアイランドのオーディション落ちる可能性が高まってるんですよねぇ（白目）

というのも、元々スターズがいる中で踏み台というと人聞きが悪いですが、デスアイランドにおいて主役及び主要登場人物というのはスターズで埋められています。

オーディション組はあくまでスターズで埋まらない穴を埋めるための人員という側面が無いとは言えないのですよね。実際に、原作でもオーディション組はスターズのレベルの高さに慄いているシーンがありますし。

しかし、だからといってオーディション組の能力が無いかと言えばそうではないわけで。そこにゴジラ夜凪ちゃんと強化茜ちゃんが合格することは確実といえども、今のホモ君の合格は演技ａｃｔで評価Ｓ取ったとしても三割くらい能力的な部分で落とされるかも、という所でしょうか。

特に、普通プレイであれば魅力高めでイケメン美女なので第一印象の評価高めで多少演技部分が拙くてもなんとかなりますが、ホモ君は普通よりは整っているけど同業者の中では普通ランク、辛いものがあります。

それを回避するための手塚監督へのゴマすりだったんですが……それもガバってますからね（白目）

中二病のころの黒歴史を覚えてられていることが大人になって弱

みになるのと同じように、過去のガバが今を刺してくるのほんとつら味です、ＲＴＡとは人生だった……？

私が思う中では最高のリカバリー決めたので出来れば再走は避けたいのですが……お、オフィスｂｅａｍ芸能事務所という名のホモ君の家に帰ってきましたね。茜ちゃんに夜凪ちゃんとルイレイ、あとヒゲ監督に柊さんもなぜかやって来ています。

というか、普通にカチンコソードとかルイレイと遊んでるヒゲ監督に、ココア入れてる柊さんと夜凪ちゃんと、普通に人の家で和んでるのがなんとも言えませんね。

確かに下手すると機材だらけのスタジオ大黒天よりもホモ君の家広いんですよね……どうやらマンションの１フロア押さえて壁取っ払っているのがホモくん家のようですから、３ＬＤＫなんてものじゃありません。

まぁここでルイレイを預かりつつ少し夜凪ちゃん好感度も稼いでおきましょう……ただし千世子ちゃんと知り合った状態でデスアイランド編がやって来ているので、必要以上に仲良くはならないようソファに座るのは茜ちゃんの隣で固定しておきます。

茜ちゃんは好感度で変なイベントが起こったりしない安牌ですからね、今ＲＴＡでは恋人は作らなくていいですが役者ルートでなければ料理上手でかわいい茜ちゃん恋人は普通にうま味です。役者だと貰えるスキルとか学ぶものがあんまりないのと、育つ主人公とで悩んじゃうのであんまりオススメできません。

さて、一家団欒の穂積家（穂積姓一人）ですがこの時期だとそろそろ記者会見のころです……お、始まりましたね。

＞いつもよりも騒がしい我が家で、いつものようにソファに座るあなたが、ふとテレビを見てみるとこの間に見た顔が記者会見を開いている。

＞映画『デスアイランド』制作発表記者会見……という題目のようだ。

はいきました、役者経験が一度でもあれば発生するデスアイランド編始動の強制イベントです。
夜凪ちゃんもヒゲもじっと見ていますね、ホモ君も見ています……あれ、なんで今ストレス微増した？　ってあぁ、カメラ位置ちょっと悪いですね、監督や撮影スキル高めてると他の人が撮ったものが不出来だと上がることがあります。
しかしそうなると、割とホモ君は自他ともに厳しい性格なのかもしれませんね。初期の地の性格はランダムで決められますが、ＲＴＡ的にこれは割とうま味です。
何故なら、下手なモノ見るとストレス溜めますが、いいもの見たり自分が会心の出来を起こせばその分ストレスが減りますのでミスをしない前提のＲＴＡではメリットの方が勝るためですね。
それはともかく、ホモ君の見る先では千世子ちゃんが天使の笑顔で記者会見をやってますし、夜凪ちゃんとヒゲ監督は原作と同じく顔の見えない千世子ちゃんに会いたい夜凪ちゃんが展開されています。
オーディションまでは一か月ありますが、さてステータス上げ間に合うかなぁ……
……？　今何かおかしな台詞がありましたよ？
＞スターズ主演映画「デスアイランド」はどうやら若手俳優のオーディションを行うらしい。
＞画面では百城千世子によってその内容が説明されている。
＞「スターズ主演映画『デスアイランド』は２４名の若手俳優を起用する予定です」
＞「うち１３名は、私を始めとした主にスターズ俳優が務めさせていただきます」
＞「残りの俳優は、一般オーディションから募ります。私達と一緒に映画を作りませんか」
＞「スターズはまだ見ぬ才能を求めています」
＞「私達はあなたとの共演を楽しみにしています」
……

オーディション枠、減ってね？
く、糞乱数うううううううううううううううううううう
!!!!!
あああああああああああああああああああああああああ
!!!!
……ふぅー、失礼しました。訳が分からないという演劇奇譚初心者の方に説明しますと、このデスアイランドでスターズがオーディションをする理由は、スターズの引き立て役にするために選んでいる、また話題作りの為という面がもちろんあります。
ですが、一番の理由として正しいのはスターズの俳優を２４人も一つのスケジュールで拘束できない事、なんです。
銀河鉄道の夜編で星アリサ社長が言っているように、基本的にスターズの役者というのは主役である、主役として経験を積んでいける人で構成されています。つまり何かしらの仕事に出るとなった時はほぼ確実に主役です、他の役よりも多くスケジュール拘束されるんですね。
それの最もたるは百城千世子ちゃんですけど、ともかくそういう理由でスターズは１２人押さえたことが凄いという状況でした。
しかし、今作においては自由度が売りなところもあるせいで、最低１２人が集まるのが確定しているだけです。なぜそんなことになっているのかというと、初期スターズの主人公がデスアイランドに乗り込むためにファジーにしているというのが有力説ですね。
どちらにしても、ここでこの糞乱数は新井、もとい辛いってレベルじゃねーぞ！　って感じですかね……どうしてっ……どうして本走の時に限ってこんなことにっ……！
＞テレビを見ていたあなただったが、スマホに連絡が入っていることに気が付いた。
お？
＞『Ｆｒｏｍ　手塚監督』
＞『正式な依頼は後になるけれど、スターズからの依頼だと思ってくれていいよ！』

＞『スターズ主催映画での副監督と、俳優としての仕事、受けてもらえないかな？』

……

――チャート通りですね！

「要は、あいつのやっていることは足し算だ」

スターズの資料室、そこに置かれているビデオデッキと一体化したテレビの前で佇んでいる中年が二人。

一人はカンヌ世界三大映画祭全てで入賞を果たした、しかし日本においては新進気鋭と言っていい黒山墨字監督。

そしてもう一人は、スターズ所属の脚本家、ＮＧを取らない監督として業界から重宝される外れを作らない監督、手塚由紀治。

二人の共通点は同じ脚本、映画を手掛けるという一点が関わるのみ。恐らく、街などですれ違ったとしてもお互いに気にはしないだろう。

しかし、この場においては――共に、ある三人について話がしたいという面で二人の足はその場に止められていた。もっとも、黒山の方は手塚の語る一人には興味があまりないが。

「足し算かぁ。それをどういう意味で言っているかとか、そういうのちゃんと口にしないから現場で所属俳優に蹴られたりするんだよ。ちょっと前に現場で見たけど」

「一から説明して分かればいい、だがアイツは実感を伴わないと駄目だからそれじゃ駄目なんだっつの。というか見てたら止めろや、暴力振るわれてんだぞ」

「いやぁ、僕より若いんだしエネルギー有り余ってるでしょ。それよりも、続き」

「三歳差だろうが……穂積は、自分の技術・視点をそのまま役者に付与している。そのためには映画の、カメラが向けられている範囲で空間

を切り取るという行為が必要なんだろう。ただ口で言うだけでは無理だ、範囲指定することであいつは役者に自分が撮りたいものを悟らせる様にすることが出来る」
　黒山が当たり前のように語る、穂積元就という映画監督見習いの異常性。それは実際に黒山がようやく見つけた自分の仲間、役者の原石である夜凪景を手に入れるにあたってやらなければならなくなった、かの青年の指導にて知る事が出来た物であった。
　そしてそれは、監督という生き物にとって垂涎の才能である。
「ははは……なんとなく分かってたけど、実際に他の人の口から聞くとまた違うな」
「だろうな、スターズの奴等にしてみれば最高の監督になれるだろう。なんせ、監督と役者の意思疎通が完璧になる、ＮＧなんて役者側がクソでなきゃ起きようがなくなるからな」
「だけど、そんなに役者に寄り添って自分の方は大丈夫なのかい？それ」
「むしろ自分の方に一切掛けるものが無いから出来ているんだろう、自分の事は既に悟っているって事だな」
「うーん、ブッダかな？」
　手塚が冗談めいて呟く言葉には、サングラスの奥に隠された切れ長の瞳ほどの熱意は籠っていない。
　それは、黒山の方も重々承知だった。彼等は、かの青年が二人の執心する女優にどのような影響を与えるのか、その一点だけで会話を続かせる。
「先ほど見た、百城千世子の演技に関してもそういうことだ。穂積が大衆の視界というものをカバーしている分、百城千世子本人にかかる負担は相当に減っているはずだ。その軽くなった分がそのまま天使としての厚みになって更に引き出される」
「なるほどなるほど、まさしく天使のベストパートナーって事か。妬けるなぁ、これ見て映画監督辞した人もいるくらいだよ」
「技術的な部分はクソもクソだがな、まだこの時は」
　それに、と黒山は話を続ける。

「この撮り方は俯瞰視点を持てない役者とは致命的に相性が悪い。穂積がいくら視点を付与しようとも、そもそも役者側が気付かなければこれは無意味だ。それが分かってやがるから、ウチのには軽いものだけで演技指導なんかやりやがらなかったわけだが」
「彼女、所属は彼のトコだろうに」
「出向してきてんだから俺ので変わんねぇよ」
「だから蹴られるんだよ墨字君」
　まるで変わらない黒山監督に少し笑い、短くなってきた煙草を灰皿に押し付ける手塚。彼の中で穂積という映画監督見習いの異常性の整理が出来始めている、そしてどうするのかも、黒山との会話の中で決め始めていた。
「だけど、それだと役者の方は大変だねぇ。彼に与えられたものでも、見せてしまったからにはその時の演技を求められる。一種のドーピングで出した結果を常に求められるようになるのか」
「……俺もそう思っていた。だが違う」
　そして、手塚の中でそれを決めたのはこの時である。
「穂積が行った視点の付与を、役者はそれとは知らずとも感覚で覚えている。それを掴めるかは役者次第かもしれねぇ。だが、穂積と夜凪の出現は、恐らくこの業界のレベルというものを根本から底上げし始める」
「あいつが技術を身につければ身につけるほど、付与されるものも強固になる」
「だから俺はあいつも育て上げてやるさ。あいつの身につけた物全てを夜凪に吸収させるためにな」
　話はこれで済んだとばかりに扉に手をかけ出ていく黒山。彼の頭の中は仲間である夜凪景の事でしか今は埋まっていない、手塚の事を気にしている素振りもなく、また彼としてはこうして穂積の話をすると同時に夜凪景という存在を手塚に知らしめることに今回の目的はあったのだから。
　だが、それは手塚にしても同じことであった。
　彼の中を占めているのは、穂積という青年を用いて、どうやって天

使の仮面を剥がすのか。それだけであったのだから。

死島編

Ｓｃｅｎｅ８『デスルーラまで何マイル？』

「今更なんですけど、２４人スターズで埋めれませんか？」
「うーん、無理だと分かってるのに聞く辺り黒山君の影響を感じるね」
「いくらかオリ設定突っ込んで……っていうのも原作勢には受け入れ辛いですかね。そういう脚本の見せ所は違うか。でも、結局のところスターズのスタイルとこの企画噛み合ってないんですよ、無理にでも２４人押さえてやる方が良かったなんて言われかねませんね」
　僕は穂積くんにメールを出した次の日、正式な契約を結ぶためにスターズの会議室を借り一対一で彼と話す事にした。
　彼が飲んでくれるかどうかは、彼の実績を考えれば美味しい話であるから断られることは無いと思っていたし、実際に返事も一発でＯＫを出してくれたが……そうして助監督としての地位を得た彼が最初に言ったのがこれであるのだから苦笑しかないや。
　助監督、言葉だけだと監督の補助役として半人前のような役割だと日本では思われがちだけど、実際は監督やメインスタッフと同等の権限を持つ役割だ。実際、監督よりも助監督の方がギャラが高かったりする時だってあるくらいだから。
　だけど、今回においては少し違う。
「その辺を埋めるための助監督というわけさ。でもはっきり言って、撮影の全般に穂積君が口を出せる部分はあまりないと思う」
「実績なし助監督だから何言ってもプロデューサーが頷きませんって事ですか」
「その辺も話が早くて助かるよ」
　そう、このデスアイランドはスターズ主催。こういった僕が使える人事は美術監督なども含めたメインスタッフに限定されているし、それに予算を考えるプロデューサーは映画の出来よりもスターズの利益を考える。
　プロデューサーというのは、現場のトップが監督であるのに対して

スポンサーの意図を汲んだり汲まなかったりする役職と言っていいだろう。そして、プロデューサーというのは現場のトップよりも単純に偉い。

それを思えば、穂積君が何を言ったとしても撮影の細々な所以外のもので受け入れられるものは無い。プロデューサーにとってこの映画は、百城千世子のための映画でしかなく穂積君の初めての助監督映画などではないのだからね。

ま、一つだけ彼だけがとれる裏技もあるんだけど……

「それでも僕が呼ばれた理由は……まぁ、分かんなくもないですけど中々あくどいというか」

「おや、分かるのかい？」

「そりゃ分かりますよ、要はオーディション組のまとめ役になれってことなんでしょう。助監督と同時にオーディション組と同じく非スターズの役者という枠もそのために作ってある。それも含めて助監督の仕事というわけで」

企画書に脚本を矯めつ眇めつしながら話す彼の言葉には迷いというのはない。助監督という立場でいることを契約した瞬間から、彼の中にあるのは一つの映画を作り上げるために自分が何をすべきなのか、だけであるのだろう。

「そういうこと。そして脚本上、百城千世子やスターズ俳優に喰われがちなオーディション組の不満、愚痴を君に聞いてもらうことになる」

「はは、何かしら働きかけて変える事が出来なかった場合恨まれる立場じゃないですか」

「それも含めて、だよ」

「……流石にそこまで持たされると、こっちも色々言いたくなりますけど」

うん、そうだろうね。元々助監督にスターズ以外から持ってくる話は出ていたけれど、明らかにスターズ寄りの現場スタッフや、今作のプロデューサーはずぼらでないスポンサーに寄り添うタイプだと知られているから、中々見つからなかった。

そこを、スターズ俳優の何人かに話題に出してもらい、百城千世子の後押しを受けて彼を引っ張り出してきた。
これこそ彼だけが使える一つの裏技。百城千世子の素顔を撮ったというスターズのスタッフだけが持つ彼への憧憬とも羨望ともつかない感情に、スターズ俳優からの子役時代に培われた信頼。
そして百城千世子との縁。彼と彼女を使うことで僕は、今の仮面の先を見ると決めている。
そうした僕の執念も含めて、彼だけに使えるお飾りの助監督から一度だけ逸脱できる裏技だ。
彼が助監督になれたように、お飾りをさせる見返りとして彼は一つだけ僕らに対して通せる要求がある。
それがなんであるのか、ここが僕の賭けの正念場になるだろう。彼からは見えない足の上に置いた手をしっかりと握りしめた。
「そうだろうね！　だから、一つくらいなら監督として要望を通せるようにするよ。実績なんて昔の子役時代を知ってるスタッフにとってはあるようなものだから、それなのにお飾りと胃痛枠を任せることに苦い気持ちがないわけじゃないんだ」
「役者増やせとかは無理だけど、まぁ現場でなんとかなることなら聞くよ」
「では……――――――ことを許してほしいですね」
その言葉を聞いて、意外に思いつつも……僕は確かに賭けに勝った。

「おら穂積、その権限使って役者一人くらい通すくらいはできるだろうがよ……！」
「黒山監督だって分かるでしょうが、明らかに私が据えられてるのはお飾りの無権限だっていうのが……！　テレビのＡＤと変わりませんよ……！」
「うるせえなんとかしろや！」

「理不尽すぎるわヒゲ！」
　事務所という名の元就くんの家に夜凪ちゃんを連れて帰ってきたら、玄関で黒山さんＶＳ元就くんの総合格闘技が繰り広げられていた。
　いや、何やっとるんや……っていうのも今更やな、この二人は元就くんが役者続けることにした事とか、夜凪ちゃんの扱いとか、冷蔵庫に入れてたジュースが無くなったとかそんなことでよくケンカしてるからな。
　ちなみに今はがっぷりよつから互いに腕を取りに行くようにしてるみたいやな、何かもう私もプロレスのアナウンサー出来そうなくらいに戦局が見えるようになってしもうたわ。
「ていっ」
「ぐほっ！　てめえ夜凪ノータイムで俺を蹴ってるんじゃねえ！」
「大体黒山さんと先輩がまともに組み合ってる時は黒山さんの方が悪いのよ」
　おー、綺麗に脇腹蹴ったなぁ。夜凪ちゃんはすらっとしてるから足技が凄く絵になる。元就くんが良く言ってた受け売りやけど、体格がシャープであることはその動作によって動く部分が鮮明になるから映える……やったかな？　逆に、体の一部が大きい人が同じようにやる場合、動作以外のその身体で目立つ部分に目線が散乱するからキレが同じでも違う様に見えるやったはず。
　まー私の記憶が正しいかはあとで元就くんに聞き直すとして、とりあえず喧嘩から離れた元就くんに飲みかけやけどペットボトルの麦茶を渡してあげた。今更間接キスとか気にする間柄でもないしな、なんなら子役時代は役の関係で一緒の布団で寝たことだってあるし。
　それにしても、今度は何で取っ組みあいしてたんやろ？
「聞け夜凪、こいつは一人だけ百城千世子に会いに行く算段をつけやがった裏切り者なんだ。しかもそれを使ってお前を手助けするつもりもないときてる」
「えっ……先輩？」
「人聞き悪すぎませんかね……！　ただ単に、デスアイランドの助監

督の仕事が入り込んできただけですよ、それも権限的にはお飾りです」
「おー……助監督ってことはＡＤやな、確かに使い走りや」
「あぁ、違うの茜ちゃん。映画で助監督はテレビのＡＤとは違って時には監督に勝るような権限を持つことだってあるんだよ」
　柊さんが私のテレビ業界に長く浸かっているために欠けていた常識を補ってくれた。それを聞くと、大分元就くん出世したなぁって思うけれど、その元就くんがお飾りって言ってるくらいやから多分ほんとにやれることがないんやろな。
　そして実際に元就くんがどういう立場になるのかを説明してくれた時には、皆その立場に同情してしまうような空気になってしもた。それでも監督目指すんなら百城千世子が出てる作品の助監督はキャリアやろ、って言ってあげたいけれどそういう空気でもないなぁ。
「つーことは、実質オーディション組のお守でしかないのか」
「そう言ってるでしょうに」
「使えねえな」
「はっきり言えとは言ってないんですよね」
「ええと、その、先輩。でも諦めなきゃきっと先輩の意見も通せると思うの」
「あぁ、それはそうかもしれないけどね夜凪後輩」
「だから、私を推してくれるのを諦めないで」
「自己利益十割からの慰めだったかぁ」
　はは、色々言われとるなぁ元就くん。元就くんが辞めてから、高校生の元就くんと私と二人だけで居た時よりも、夜凪ちゃんを拾ってきたときよりも、どんどんと元就くんは話す言葉が増えていった。
　やけど、それが寂しいとかそういうのとは違うと私は分かってる。単純に、話さないといけないことが増えたから彼は話す言葉が増えただけなんだと。
　だから、これから先に言われることも、まだまだ慣れてない夜凪ちゃんたちと違って私はいつもと同じように先回りしよう。
「それで元就くん、私も応募したほうがええかな？」

「他に仕事は入れてないなら、身内がいてくれた方がシンプルにありがたいからね」
「はいはい、流石に夜凪ちゃんクラスが１０人もいるってことはないやろ」
「いると楽しいなぁ」「なるまで待っててやー」
「あの、茜ちゃん……？」
「ん？　私もデスアイランドのオーディション受けるって事やで」
「！　茜ちゃん！」
　んふふ、夜凪ちゃんは仲間が出来たって感じでかわいいなぁ。実際はオーディションっていうのは仲間同士でも蹴落としあいするやつなんやけど、それよりも夜凪ちゃんは仲間が出来るってことの方が大きいんやろな。
　それに、元就くんの言うホンモノである夜凪ちゃんなら、これからは自分がオーディションで落ちるってことはないはずや。スターズの方はなんか星アリサと夜凪ちゃんの演技が似てるとかで、印象が良くないのが大きいって元就くん言うとったしな。
　やから、私がこのオーディションに受かれば万々歳。私が、全国のオーディションに負けてしもうたとしても、その時は夜凪ちゃんに自分が受かった裏で泣く人もいる事も仲間が自分に追いつけない寂寥感というものも教える事が出来る。
　夜凪ちゃんの演技は自分が今まで感じたこと、経験したことの集大成やって聞いたから、そういった感情の動きすらも夜凪ちゃんは演技に使える。
　なんやそれ、生きる事全部が役になれるとか反則やん！
　そんな風に思わなかったことがないなんて口が裂けても言えんけどな。
　でも、私は元就くんが嘘は言わないって信じてるから。
「それじゃあ、茜ちゃんに夜凪後輩。私の初助監督作品、合格するようにね」
「まかせときやー」
「分かったわ！」

彼が嘘をついたことは無い。だから、今が無理だったとしても。
諦めない私は、いつかきっと、ホンモノになれるから。

ホモ君が過労死への道を走り始めたＲＴＡ、はぁじまーるよー。
はい、というわけで今回からクソ映画編改めデスアイランド編に突入していきますが、普通のプレイだと大抵はスターズ側かスタジオ大黒天側の役者としてオーディションに応募するところから始まります。
ですが、このホモ君は助監督として雇われる事になったので、始まりがスターズの会議室で怪しいサングラスのおじさんと二人きりからスタートです。名前に偽りなしだな！
それはともかく、デスアイランド編から役者ではなくスタッフ側というのはオリチャーもオリチャーですが、走者がやった事が無いチャートというわけではありません。
と、いうのもこの時点で監督スキルに全振りしている場合役者スキルが悲惨なことになっている可能性が高いわけですので、下手に全国オーディションに一縷の望みをかけるよりもスタッフで交ざる方が、千世子ちゃんや夜凪ちゃん、他の役者と繋ぎを持ちたいというだけなら楽だったりもします。純粋監督ルートだとこっち狙うのも手ですね。
しかしこちらのホモ君は役者としての経験も欲しいのでそれはまず味だったのですが、助監督であり、なおかつオーディション組と同じ端役とはいえデスアイランドの役者に潜り込めたのでこのチャートこそ最良のチャートだと信じて走り抜けましょう、タイム短縮できればオリチャーでありガバじゃないんだ！（必死）
と、いうわけでさっそく助監督の契約を結びまして……
なんだぁ、これわぁ……？
助監督ですが、ほとんど映画に関してホモ君が口を挟める権利がないような契約になってますねぇ。これやれる事って助監督という名の雑用係じゃないでしょうか。
いや、良く見るとオーディション組の取りまとめが仕事内容の中に

入ってますね。なるほど、つまりスターズだらけの中でオーディション組が疎外感等を味わう事が無い様に肩書は助監督なんてホモ君をつけておこうってわけですか。

うーん、汚い大人の契約みたいな感じですね。これは普通の脚本家では喰いついてこないでしょう。

でもホモ君は喰いつきます（一転攻勢）

オーディション組の取りまとめはそのまま将来使える役者との面識が増えて、映画自体が千世子ちゃんと夜凪ちゃんのおかげで成功することが決まり切っている以上、この先でもオーディション組にとって代表作といえばデスアイランドになる可能性は大です。

そしてその映画で戦友（予定）だった監督の話であれば、と聞いてくれる可能性も同じく大！　普通はまず味でもうま味でしかないんだなぁ。

助監督として口出しも、基本千世子ちゃんがＮＧ出さないし夜凪ちゃんもなんとかしてくれるのでホモ君がやる事はなにもありません。

つまり、雑用するだけで日本が誇る名女優夜凪景の初出演映画の助監督という立場が手に入るわけです。　やったぜ（天下無双）

なので、全然ホモ君は平気なんですが普通は受けてもらえないような内容ですからね。手塚監督がなにか一つのお願いなら、現場のトップの権限の内で聞いてくれるとの事です。なんだサングラスお前聖人かよ……

しかし、一つお願いを通すとしても中々悩みどころさんですね……千世子ちゃんと知り合えてなければ撮影前に話す時間貰ったりも出来そうですが、今は必要ないですし。

夜凪ちゃんと茜ちゃんを合格させろというのもありますが、ステータス上がってるみたいなので普通に合格してくれるでしょうしね、スカみたいなお願いは弾いて、と。

狙うのは、なるだけ役者スキルか監督スキルが稼げそうなお願いなんですが……あ、これなんかいいんじゃないでしょうか！　これなら撮影以外でもスキルを稼げる時間が発生しますし、常に仕事している

ようなものですから雑用を言いつけられたりも回避できそうです、これにしましょう！

＞あなたは、「デスアイランドの舞台裏映像を自分が撮ることを許してほしい」と手塚監督に言った。

「舞台裏映像かい？　あぁ、ＤＶＤ特典のようなものの撮影かな……うん、それならプロデューサーも特典を作れて納得するだろう、いいよ！」

＞あなたのお願いは了承された。

よし、これでデスアイランド編の間ホモ君はずっとカメラを回していることが可能になりました！　これで一気に撮影スキルの荒稼ぎをしていくことにしましょうね～。

なお、ここで体力スキルが一定以上ない場合はそのまま過労死です（無慈悲）

それでは、あとはそのまま流れで手塚監督とお昼に行って帰ることにしましょう。ちなみにタッパーを持ってきているとルイレイのおかずに出来たりもするんですが、流石にホモ君は富豪系生まれなので、そういうことが出来なくなってます。

茜ちゃんや夜凪ちゃん、実質ＪＤと真ＪＫの作るご飯の方が希少価値が高い、はっきりわかんだね。

本日はここまでです。ご視聴ありがとうございました。